山里は　雪ふりつみて　道もなし
　けふこん人を　あはれとは見ん

賀の御屏風に

うごきなき　巌のはても　君ぞ見ん
　をとめの袖の　なでつくすまで

清原元輔

東三條院の御四十九日の内に。子日いでき
たりけるに。宮の君といひける人のもとに
遣しける

たれにより　松をも引かん　うぐひすの
　初音かひなき　今日にもあるかな

藤原公任

三百六十首の中に

秋風は　吹きな破りそ　わがやどの
　あばらかくせる　蜘蛛のすがきを

曾根好忠

内裡の御屏風に

月影の　たなかみ川に　清ければ
　網代の氷魚の　よるも見わけり

清原元輔

子におくれてよみ侍りける

なよ竹の　わが子の世をば　知らずして
　おほし立てつつ　思ひけるかな

平兼盛

娘におくれ侍りて

わすられて　しばしまどろむ　程もがな
　いつかは君を　夢ならで見ん

中務

（以上十首拾遺和歌集）

題しらず

三島江に　つのぐみわたる　蘆の根の
　一夜のほどに　春めきにけり

曾禰好忠

正月ばかりに。津の國に侍りけるころ

人のもとにいひつかはしける

ところあらん　人に見せばや　津の國の
難波わたりの　春のけしきを　　能因法師

よめる

雨の夜床夏を思ふといふ心を　　能因法師

いかならん　今宵の雨に　床夏の
けさだに露の　れもげなりつる

よめる

搗衣をよみ侍りける　　伊勢大輔

さよふけて　衣しでうつ　聲きけば
いりがぬ人も　寐られざりけり

大井河にてよみ侍りける　　藤原定賴

水もなく　見わこそわたれ　大井河
みねのもみぢば　雨とふれども

秋身まかりける人を思ひ出でゝ

よめる

年ごとに　むかしは遠く　なりゆけど
うかりし秋は　又も來にけり　　源重之

世の中を何にたとへんといふ古言を上におきて。あまたよみ侍りけるに　　源順

世の中を　何にたとへん　秋の田を
ほのかにてらす　宵の稲妻

普門品　　藤原公任

世をすくふ　内にはたれか　入らざらん
あまねき門を　人しさゝねば

（以上八首後拾遺和歌集）

水風晩涼といへることをよめる　　源俊賴

風ふけば　蓮の浮葉に　玉こねて

すゞしくなりぬ　日ぐらしのこゑ

對水待月といへることをよめる　藤原基俊

夏のよの　月まつほどの　手ずさびに
　岩もる清水　いくむすびしつ

師賢朝臣の梅津の山里に人々まかりて。田家秋風といへる事をよめる　源經信

夕されば　門田のいなば　おとづれて
　蘆のまろ屋に　秋かぜぞふく

題しらず　よみ人しらず

かしがまし　山の下ゆく　さゞれ水
　あなかま我も　思ふこゝろあり

寄石戀といへることをよめる　前齋院六條

逢ふことを　問ふ石神の　つれなさに
　わがこゝろのみ　動きぬるかな

青黛畫眉細長といへることをよめる　源俊頼

さりともと　かく眉ずみの　いたづらに
　こゝろぼそくも　老いにけるかな

（以上六首金葉和歌集）

題しらず　源頼政

みやま木の　うのこずゑとも　見わざりし
　さくらは花に　あらはれにけり

新院のおほせごとにて百首の歌奉りけるに
よめる　藤原顯輔

あまの川　よこぎる雲や　七夕の

空だきものゝ　烟なるらん

鷹狩をよめる　藤原長能

あられふる　交野のみのゝ　かり衣
ぬれぬ宿かす　人しなければ

後三條院の住吉詣によめる　よみ人しらず

君が代の　久しかるべき　ためしにや
神もうゑけん　すみよしの松

題しらず　崇德院

瀬をはやみ　岩にせかるゝ　瀧川の
われても末に　あはんとぞおもふ

神祇伯顯仲廣田にて歌合し侍るとて。寄月述懷といふ事をよみてといひ侍りければ。

つかはしける　藤原顯輔

なには江の　蘆間にやどる　月みれば
わが身ひとつも　沈まざりけり

（以上六首詞花和歌集）

春雨の心をよめる　藤原基俊

春雨の　ふりうめしより　片岡の
すゑのゝ原ぞ　淺みどりなる

故郷花といへるこゝろをよみ侍りける　平忠度

さゝなみや　しがの都は　あれにしを
むかしながらの　山ざくらかな

落花滿山路といへる心をよめる　赤染衞門

踏めば惜し　踏まではゆかん　方もなし
心づくしの　山ざくらかな

時鳥の歌とてよめる　藤原清輔

風越を　夕こねくれば　ほとゝぎす
　ふもとの雲の　底になくなり

題しらず　俊惠法師

岩間もる　清水を宿に　せきとめて
　ほかより夏を　すぐしつるかな

水無月祓をよめる　よみ人しらず

御祓する　川瀬にさよや　更けぬらん
　かへるたもとに　秋風ぞふく

澗底月といへる心をよみ侍りける　源俊頼

てる月の　旅寐のとこや　まもとゆふ
　かづらき山の　谷川の水

堀川院の御時、百首の歌奉りける時よめる

高砂の　をのへの鐘の　音すなり
　あかつきかけて　霜やおくらん　前中納言匡房

戀の心をよめる　待賢門院堀川

ながゝらん　心もしらず　くろかみの
　みだれて今朝は　物をこそおもへ

同じ心をよめる　藤原基俊

人ごゝろ　何をたのみて　水無瀬川
　瀬々のふる杭　くちはてぬらん

旅のこゝろをよめる（旋頭歌）　藤原顯輔

あづまぢの　野島がさきの　濱かぜに
　わが紐ゆひし　妹が顔のみ　面影に見ゆ

勸發品の心をよめる　藤原俊成

さらに又　花ぞ散りしく　鷲の山

法のむしろの　暮がたのうら

（以上十二首千載和歌集）

其二　長歌

堀川院の御時百首の歌奉りける時。述懷の歌とてよみて奉りける　源俊頼

もがみ川
思ふこゝろは　多かれど
底のみくづと　なる事は
思ひ知らずは　なけれども
片われ舟の　埋もれて
波の立居に　あふげども
いふ事もなき　悲しさに
れさふる袖も　朽ちはてぬ
思はん人に　近江なる
瀬々の岩かど　わきかへり
ゆく方もなく　せかれつゝ
藻に住む蟲の　われからと
いはではねこう　渚なる
引く人もなき　嘆きすと
むなしき空は　みどりにて
音をのみなけば　唐衣
何事にかは　あはれとも
打出の濱の　打ちいでゝ

いふとも誰か　さゝがにの
ことを軒端に　吹く風の
うはの空にも　教ふべき
御垣が原に　芹つみし
我身のうへに　なりはてぬ
雲の上には　かよへども
月の桂の　折られねば
開けぬことの　いぶせさに
このもかのもに　立ちまじり
花の袂に　ぬぎかへて
おもふ人々　ほだしにて
かゝるうき身の　つれもなく
五つの十に　なりにけり
ひかりのまにも　定めなし
いかさまにても　かきつらん
はげしき頃と　知りながら
梓の杣に　宮木引き
むかしをよりに　聞きしかど
さすがに御代の　始より
難波のことも　久方の
うけらが花の　咲きながら
四方の山邊に　あくがれて
うつぶし染めの　麻ごろも
後の世をだに　と思へども
ゆくべき方も　まどはれぬ
經にける年を　數ふれば
いまゆく末は　稻妻の
たとへば光　ながらへて

過ぎにしばかり　すぐすとも　夢に夢みし　心地して
ひまゆく駒に　異ならじ　さらにもいはじ　冬枯の
尾花が末の　つゆなれば　風をだにも　待たずして
もとの雫と　なりはてん　程をばいつと　知りてかは
暮にとだにも　沈むべき　かくのみ常に　あらうひて
猶ふるさとに　住の江の　汐にたゞよふ　うつせ貝
うつし心も　うせはてゝ　あるにもあらぬ　世の中に
又なにごとを　三熊野の　浦の濱木綿　かさねつゝ
うきに堪へたる　ためしには　なるをの松の　つれ〴〵と
いたづらごとを　書きつめて　あはれ知れらん　行末の
人のためには　れのゴから　忍ばれぬべき　身なれども
はかなき事も　雲鳥の　あやにかなはぬ　癖なれば
これもさこうは　實なし栗　朽葉が下に　うづもれめ
うれにつけても　津の國の　生田の森の　いくたびか
海人のたく繩　くりかへし　心にうはぬ　身を恨むらん

反歌

世の中は　うき身にうへる　影なれや
れもひすつれど　離れざりけり

（千載和歌集）

百首の歌めしける時よませ給うける

崇德院

敷島や　やまとの歌の　傳はりを
聞けば遙かに　久方の　天つ神代に　はじまりて
三十文字あまり　一文字は　出雲の宮の　八雲より
起りけりとゞ　しるすなる　それより後は　百草の
言の葉しげく　ちり〴〵に　風につけつゝ　聞ゆれど
近きためしに　堀河の　流れを汲みて　さゝ波の
よりくる人に　あつらへて　つたなき事は　濱千鳥

跡を末まで　とどめじと　思ひながらも　津の國の
難波の浦の　なにとなく　舟のさすがに　此ことを
忍び習ひし　なごりにて　世の人ぎゝは　はづかしの
もりもやせんと　思へども　心にもあらず　書きつらねぬる

（千載和歌集）

同じ百首奉りける時の長歌

待賢門院堀川

時しらぬ　谷の埋木　くちはてゝ
むかしの春の　戀しさに　何のあやめも　分かずのみ
かはらぬ月の　影見ても　時雨にぬるゝ　袖のうちに
しほたれまさる　海人衣　あはれをかけて　とふ人も
波にたゞよふ　釣舟の　漕ぎ離れにし　世なれども
君に心を　かけしより　しげき愁も　わすれ草
忘れがほにて　住の江の　松の千年の　はるゝ〳〵と

梢はるかに　榮ゆべき　常磐のかげを　たのむにも
なぐさの濱の　なぐさみて　ふるの社の　うのかみに
色ふかゝらで　忘れにし　紅葉の下葉　のこるやと
れいうの森に　尋ぬれど　今は嵐に　たぐひつゝ
霜かれ〳〵に　れとろへて　かきあつめたる　水茎に
淺き心の　かくれなく　流れての名を　をし鳥の
うきためしにや　ならんとすらん

（千載和歌集）

其三　今樣歌

よみ人しらず

蓬萊山

逢萊山には　千とせふる　萬歳千秋（ばんさいせんしう）　かさなれり
松のえだには　鶴すぐひ　巖のうばには　龜ありぶ

（五節間郢曲）

ふるき都

藤原實定

ふるき都を　來て見れば　淺茅が原とぞ　なりにける

月のひかりは　くまなくて
秋風のみぞ　身にはしむ
（源平盛衰記）

よみ人しらず

千手の誓
よろづの佛の　願よりも
千手の誓ぞ　頼もしき
枯れたる木草も　忽に
花さき實なる　ところ聞け
（源平盛衰記）

よみ人しらず

姫小松
君をはじめて　見る時は
千代も經ぬべし　姫小松
ねまへの池なる　亀岡に
鶴こそ群れゐて　遊ぶなれ
（源平盛衰記）

よみ人しらず

佛の方便
佛の方便　なりければ
神祇の威光　たのもしや
たゝけば必ず　響きあり
仰げば定めて　花ぞ咲く
（源平盛衰記）

琵琶の聲
月影のみ　よするは
田上川の　みなかみ
稲舟の　わづらふ
最上川の　早き瀬
うことも知らぬ　琵琶の聲
霞のひまに　まぎれり
（義經記）

よみ人しらず

一天四海
治まり靡く　時なれや
一天四海の　内のみか
人の國まで　日の本の
もろこしが原も　此ところ
（吾妻鏡）

日本大文學史卷の二終

版權所有

明治卅二年五月卅日印刷
明治卅二年六月四日發行

定價金四拾錢

著者　大和田建樹　東京市日本橋區本町三丁目八番地
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區兜町二番地
印刷者　三井駒治　東京市日本橋區兜町二番地
印刷所　東京印刷株式會社
發兌元　博文館　東京市日本橋區本町三丁目

日本大文學史卷の一目次及江湖批評

目次

卷の一――――四月七日發行

第一編　總論

第一章……我國の言語
一地方の言語○我日本の國語○國語に生命あり○國語の第一期○國語の第二期○國語の第三期○國語の第四期○國語の第五期○國語の第六期○國語の第七期

第二章……言語と文章
文章は言語の筆記○上古は言文兩立せず○言文兩立の原因○言文相違の點

第三章……普通文と美文
理會を主とする文○感動を主とする文○二文の間の等差○美文に要する性質

第四章……散文と韻文
散文とは何○二文の間の等差○裝飾の種類○韻文の分類

第五章……謂はゆる和文學
世人の所謂和文○著者の所謂和文○和文學の稱

第六章……文學と外界の現象
文學は現象の反射○其地理との關係○其社會との關係○文學には時代の特長あり

第七章……外國文學との關係
新事實は文學上の新題目○支那文學流行の影響○歐米文學流行の影響○主客別なかるべからず○我文學發達の妨害者○言文を近づかしめたる有功者

第八章……文學史を學ぶの必要
古人の遺したる歌文○文學の興味あるとなきと○文學者獨得の興味○特に我國文學者の快樂○國文學には沿革あり○文學史は其沿革を語るもの○文學史は文明史の最大部分を占めたり○文學史は又愛國心を發生するの原素

第九章……文學史と普通歴史との異同
普通歴史の時代○文學史の時代

第二編　上古の文學

第一期　紀元前後

第一章……概說
第一期の區域○神代の傳說○東征と開國○崇神垂仁の兩朝○熊襲と東夷

第二章……言語の起源
純粹無垢の言語○音便訛音の皆無

第三章……文字の有無
文字なかりしといふ說○文字ありしといふ論○世にいふ神代文字○日文○天名地鎭○秀眞○結論

批評

▲國學院雜誌評……大和田建樹氏の著なり。「文學史は古今文界見物の滝車旅行なり。滝車旅行あに朝に富士の雪と別れ、夕に淺山の雲に迎へらるるの快なからむや。人磨赤人と語りも未だ終へざるに、其之躬恒は歌ひつゝ早前に立てり。忽にして源氏の作者來り、忽にして今昔の作者來り、忽にして西行、忽にして兼好、遠りも迎へも暇あらざらむとす。是が草鞋にて歩く旅人の知らぬ愉快なるべき。……小文學史をして滝車に乘りながら見あるくとせば、大文學史は著名なる停車場ごとに下車しては見物するほどの差あるべきか。……」とは、著者の自序の一節なり。この卷には總論(一)上古の文學(二)の二編ををさめたり。第一編總論には(第一章)我國の言語より說き起して(第二章)言語と文章(第三章)普通文と美文(第四章)散文と韻文(第五章)謂はゆる和文(第六章)文學と外界の現象(第七章)外國文學との關係(第八章)文學史を學ぶの必要(第九章)文學史と普通歴史との異同を論じ。第二編上古の文學てふ本領に入り、(第一期)紀元前後を(一)概說(二)言語の起原(三)文字の有無(四)和歌の起原(五)散文の起原に分解して(六)其の作例を示し(第二期)三韓交通以後を(七)概說(八)支那文學の傳來(九)佛教の傳來(十)當期の歌文に分ちて結尾に其か(十一)作例を擧ぐることと第一期の如く、一輙(第三期)藤原奈良の朝を(十二)概說して更に(十三)漢文の隆盛(十四)漢學の利用(十五)和歌の隆盛(十六)散文の成立(十七)修史の成功(十八)印刷術の起原(十九)著名の作者等を論じて(二十)和文の特色とすべく、(二十一)散文の作例を示して本卷を結べり。其の行文の平易にして流暢なるは本書の特色とすべく、茫漠たる時代に於いて、精密に筆を染むることの難きは、上代の文物を記述するに於いて常に免かれかたきことなるも、少しく簡に失せるの嫌なきにあらず。而して此を三上高津二氏の比するに、彼は常に批評的なるに反して、是の常に敍事的なるは、著者用意の周密なるにあらむ。たゞもの足らぬ心地せらるゝは如何に。さはあれど、こは只余輩望蜀の念の然らしむるなるべく、本書の眞價は其の足利時代に於いて必ずや一段の光彩を添ふるものあるべきこと、余輩の信ずる所なり。なほ完結を待ちて細說する所あらむ。

▲日本新聞評……大和田建樹氏の著にして第一編總論に於て我國の文章、言語と文章、普通文と美文、散文と韻文、和文學、文學と外界、外國文學との關係、文學史を學ぶ必要、文學史と普通歴史の異同を說き第二編上古の文學第一期紀元前後第二期三漢交通前後第三期藤原奈良の朝に及べる間の我邦文學發達の狀況を詳說す考證正確にして一々作例を示されたるが如き特に用意の周到なるを覺ゆ

▲都新聞評……太古より奈良朝に至る茲の美文學史にして廣き意味にて云ふ文學史とは聊か異る者の如く其材料も散文よりは韻文歌文に見る可き者多し

▲毎日新聞評……本邦言語の起源より言語と文章との關係を說き次で上古文學の變遷を叙す參考書としては好簡比なきを覺ゆ次卷以下益々興味を加にん

▲横濱貿易新聞評……著者は現代文壇の名流、我國文學の起源沿革を序して豈の遺憾なし第一編總論に於て言語、文章、散文、韻文、及普通文、と美文との差を論じ我國文學と外國文學の關係を明らかにして文學史と普通歴史との異同を述べ第二編に至りて上古の文學を叙する、別けて三期となし其第一期を紀元前後、第二期を三韓交通以後、第三期を藤原奈良の朝と爲し後章韻文散文の例を擧げて頗る盡せり著者自から言ふ小文學史をして滝車に乘りながら見あるくとせば大文學史は著名なる停車場毎に下車して見物する程の差あるべきかと此語取て以て此書の概評となすべく近來稀有の好著と謂ふべし

▲中央公論評……著者卷頭に序して曰く「文學史は古今文界見物の滝車旅行なり、滝車旅行あに朝に富士の雪と別れ夕に淺山の雲に迎へらるゝの快なからんや、人磨赤人と語りも終へざるに其之躬恒は歌ひつゝ早前に立てり、忽にして源氏の作者、忽ちにして今昔、作者、忽にして西行、忽にして兼好、遠りも迎へも暇あらざらんとす」と、著者果して讀者に此の快を與へ得るや否や、果して大文學史の大なる文字に相應はしき文學史を完成し得るや否や、今は只全篇の一部分のみを第一卷として出したるなれば細かに評するを得ず、完結を待て更に詳評するところあらん、行文は例に依て流暢なり

第四章……和歌の起源
諸册二尊の唱和○歌謠の濫觴○短歌の濫觴○句格の未定○和歌と曲節○軍歌
第五章……散文の起源
其種類○半ば歌めきたる文○當時の語調○作例を示し難き所
第六章……作例
第二期　三韓交通以後
第七章……概說
第二期の區域○三韓征伐○文化の輸入○支那との交通○國家秩序の進行○推古の朝○孝德の朝○天智の朝○天武の朝
第八章……支那文學の傳來
阿直岐と王仁○論語千字文○菟道稚郎子○學者文藝の來朝○漢字の渡來○史官と記錄○蒐法十七條○就きて○隋帝に遣したる國書○金石に遺れる漢文○道後の碑○宇治橋の碑○船首王後の碑○近江令○學校の濫觴○詩の創作○國史の編纂○我國にて作れる新漢字○漢語の侵入○吳音と漢音
第九章……佛法の傳來
佛像經文の渡來○僧の入朝○經文讀誦の流行○佛書の著作○佛法と人心○佛語の侵入
第十章……當期の歌文
當期の歌人○童謠○散文作例の示し難き所以○新文學と新思想

▲東京經濟雜誌評……著者嘗に和文學史の著あり、之に對して大文學史とは云ふ也紀元前後の文學より藤原奈良朝に及び、文運の隆替を詳記し配するに歐人文家の傳記と作例とを以てす、略文學史の體例を得たりと云ふべし、著者曰く和文學史は流車旅行なり、大文學史は著名なる停車場ごとに下車して見物するが如しと比較してこれだけの差は確に之あるべし、尙完成の上詳評する所あらん

▲學窓餘談評……本書は二篇に分ち、第一篇には我國の言語、言語と文章、普通文と美文、散文と韻文、謂はゆる和文學、文學と外界の現象、外國文學との關係、文學史を學ぶの必要を擧げ、第二編には上古の文學を擧げ、之を分て紀元前後、三韓交通以後、藤原奈良の朝の三期に分ち、且韻文及散文の作例を敍せたるを以て、一讀して我國文學の變遷を知るに足らん、第一卷のみを以て未だ全豹を評し難しと雖も文學界に大裨益を與ふべきや疑を容れず

▲日本人評……國文學に於て尤も秀出せりと稱せらるゝ、大和田建樹氏の編著せる所、卷首に冠して曰く、「(前略)文學史は古今文界見物の流車旅行なり、流車旅行あに朝に宮士の雪と別れ、夕に叡山の雲に迎へらるゝの快なからんや、人麿赤人と語りも未だ終らざるに、貫之の朝恒は歌ひつゝ早前に立てり、忽ちにして源氏の作者來り、忽ちにして今昔の作者來り、忽ちにして西行、忽ちにして兼好、遂りも迎へも喝あらざらんとす、是ア草鞋にて歩く旅人の知らぬ愉快なるべき。……されど大文學史は大文學史なり、小文學史をして流車に乘りながら見あるくとせば大文學史は著名なる停車場毎に下車しては見物するほどの差あらざるべきか云々」と、我國の文學史を五個の時代に大別し、神代より奈良朝の終りに至る間を上古即ち國語起源の時代と爲し、爾後延喜天曆の際に至る間を中古即ち貴族文學の時代と爲し、此より戰國の終り德川氏の始めまでを近世即ち士人文學の時代と爲し、爾後今日に至るまでを今代即治の新天地開くるまでの間を近世即ち士人文學の時代と爲し、而して本書は其首卷として先づ上古の文學を論叙せり、二編、ち國民文學の時代と爲せり、二十九章、更に上古の文學を大別して『紀元前後』『三韓交通以後』及び『藤原奈良の朝』の三期と爲し、加ふるに各期毎とに韻文及び散文の作例を添示せられたり、余輩は先づ『總論』に於て道筋の概略を腦裡に印記し、然る後列車に搭じて道中甚だ愉快に上古の文界見物を終へ、且つ隨時に著名なる各所の停車場毎に下車して、人麿赤人家持等種々の名人巨匠と相ひ語らふの愉快を加ふるを得たりき、今は唯だ翹首して徐々に中古以下の文界見物を嘗くるの日到らんことを待つのみ

第十一章……作例
第三期—藤原奈良の朝
第十二章……概說
第三期の區域○曆法○萬世の法度○釋奠○銅錢銀錢○婦女の服制○聖武天皇○黃金出つ○孝謙天皇○文學の盛運○唐人崇拜の奴隸心
第十三章……漢文の隆盛
入唐留學生○大寶律令○學制○大學○國學○大學の學科○詩文の名作○懷風藻
第十四章……漢字の利用
漢文中の國語○古事記體○宣命書○萬葉書
第十五章……和歌の隆盛
歌人の輩出○萬葉集○其歌の數○編者は誰○其歌の體○其歌の分類○其歌の背方○其書の價値○主たる作者○長短歌の妙處○佛足跡體○和歌と音樂○歌垣
第十六章……散文の成立
祝詞○宣命○傳說文
第十七章……修史の成功
假名日本記○古事記○日本紀○風土記
第十八章……印刷術の起源
律三大部○百萬塔陀羅尼○東西塔婆○無垢淨光陀羅尼
第十九章……著名の作者
第二十章……韻文の作例
第廿一章……散文の作例
以上

▲教育時論評……第一編を總論とし、我國言語の變遷、言語と文章との關係、普通文と美文との別、散文と韻文との別、文學と外界の現象、外國文學との關係等を說き、第二編を上古の文學とし、之を三期に分ちて其變遷を概說し、各期の作例を示す、特に筆路の暢達なるは著者が獨得の妙處、讀者は爭て之を歡迎せん

▲新北陸評……大文學史とは小文學史の對稱也、大和田建樹氏の著に係る、第一編に於て國文學の何物なるかを總論し、第二編に於て上古の文學を敍述す、說明簡潔聊か以て日本文學の淵源を尋ぬるに足るべし

▲神戸又新日報評……大和田建樹氏の著にして本卷には我邦言語文章の總論を初として上古神代の文辭より三韓交通以後の文學の情況、支那文學及佛法渡來後の言語文章に及ぼせる影響より下りて奈良時代に至るの文學を說く在來日本文學書中最も秩序的に最も完備せる者なり該界を補益する所多からん

▲北門新報評……第一編總論は本朝文學の起源發達を論し第二編は開闢より奈良朝に至る文學史にして體裁尤も整へたれば全部編成の上は從來諸家の著に比し最好の日本文學史たるべし

▲大坂毎日新聞評……第一編總論には我國言語の變遷、言語と文章との關係、普通文と美文との別、散文と韻文の異同、文學と外界の現象、外國文學との關係、文學史を學ぶの必要、文學史と普通歷史との異同等を說き第二編上古の文學は之を三期に分ち紀元前後、三韓交通以後及び藤原奈良の朝となし其沿革變遷を擧げ兼ねて各期に於ける諸種の作例を示せり流石は斯學の泰斗たる氏の著として行文暢達穩妥なるは喜ぶべし

帝國百科全書

既刊分類

（上製正價一冊金五拾錢郵稅拾錢）

文科

文學士高山林次郎君著
世界文明史（三版）全一冊

文科卒業 木村鷹太郎君著
東洋西洋倫理學史 全一冊

文學士姉崎正治君譯
宗教哲學（三版）全一冊

文學士笹川種郎君著
支那文學史 全一冊

文學士木寺柳次郎君著
日本歴史 全一冊

文學士高山林次郎君著
論理學（再版）全一冊

文學士畔柳都太郎君著
邦語英文典 全一冊

文學士武島又次郎君著
修辭學（再版）全一冊

文學士蟹江義丸君譯
倫理學 全一冊

理科

理學士佐藤傳藏君著
日本新地理 全一冊

理學士佐藤傳藏君著
萬國新地理 全一冊

理學士高木貞治君著
新撰算術 全一冊

理學士高木貞治君著
新撰代數學 全一冊

理學士林鶴一君著
新撰幾何學 全一冊

理學士佐藤傳藏君著
地質學 全一冊

續刊目次

●東西洋教育史……中村文學士著
●日本文明史……大町文學士著
●教育學史……熊谷文學士著
●西洋歴史……吉國文學士著
●哲學汎論……藤井文學士著
●世界文學史……上田文學士著
●十九世紀文明史……高山文學士著
●支那文明史……白川文學士著
●日本文學史……大町文學士著
●西洋哲學史……蟹江文學士著
●東洋歴史……幸田文學士著
●邦語獨逸文典……菅木文學士著
●邦語佛文典……松井文學士著
●日本文典……藤岡文學士著
●心理學……岡田文學士著
●美學……下田文學士著
●倉庫稅關及……高山文學士著
●取引所論……島崎文學士著
●東洋哲學史……松本文學士著
●世界宗教史……廣田文學士著
●日本佛教史……喜田文學士著
●日本制度史……三浦文學士著
●星學……須藤理學士著
●物理學……鵜田理學士著
●地文學……佐藤理學士著
●人類學……坪井理學士著
●動物學……會田理學士著
●植物學……飯塚理學士著
●化學……龜高理學士著
●國法學……中村法學士著
●商業經濟學……清水法學士著

分類

（並製正價一冊金卅五錢郵稅八錢）

農科

農學博士横井時敬君著
栽培汎論 全一冊

農學士楠巖君著
農産製造學 全一冊

農學士恩田鐵彌君著
農學汎論 全一冊

農學士木下義道君著
肥料學 全一冊

農學士稲垣乙丙君著
植物營養論 全一冊

林學士奧田貞衛君著
森林學 全一冊

農學士井上正賀君著
日用化學 全一冊

法科

法學士熊谷直太君著
法律汎論 全一冊

法學士梶原仲治君著
民事訴訟法釋義 全一冊

法學士上田□君著
民法釋義（親族編 相續編）全一冊

法學士熊谷直太 北條元篤君譯
國際公法 全一冊

法學士中村太郎君著
國際私法 全一冊

法學士丸尾昌雄君著
民法釋義（總則編 物權編）全一冊

法學士丸山長渡君著
法理學 全一冊

法學士添田敬一郎君著
商法汎論 全一冊

法學士笹川潔君著
財政學 全一冊

續刊目次

●銀行及外國爲替論……野口法學士著
●政治汎論……清水法學士著
●經濟汎論……池袋法學士著
●新刑法論……島田法學士著
●日本帝國憲法論……田中法學士著
●行政法……添田法學士著
●刑事訴訟法釋義……三井法學士著
●私犯法……丸尾法學士著
●政治史……森山法學士著
●契約法……小橋法學士著
●運輸汎論……菅原法學士著
●商工法律……矢部法學士著
●[illegible]學……井上農學士著
●農用器具類……西村農學士著
●畜産汎論……高見農學士著
●畜産各論……田口農學士著
●養蠶製絲……鹽澤農學士著
●氣候及土壤……佐々木農學士著
●土地改良論……上野農學士著
●栽培各論……田中農學士著
●植物病理及害蟲論……大森農學士著
●農業經濟……横井農學博士著
●農政學……高橋農學士著
●提要造林學……本多林學博士著
●森林保護學……新島林學士著
●分析化學……內藤工學士著
●測量學……山路工學士著
●應用化學……大築工學士著
●火藥學……松永工學士著
●造船學……宮廻工學士著
●構造強弱學……村瀬工學士著
●工藝美術史……塚本工學士著
●商業汎論……飯田商業學士著

發兌元 博文館

大和田建樹著

日本大文學史 卷之三

東京 博文館藏板

大和田建樹先生著書

八版 日本文學史 全

（木書の特色）

▲▲總中正価

日本文學史は組織多に亡り、採擷多に亡り、解釋多に亡り、索引の簡便に亡り、密に亡り。學生の獨學用として、專門用として、辭典として、利せざる處なかるべし。

持論

日本文學史は組織多に亡り、採擷多に亡り、解釋多に亡り、索引の簡便に亡り、密に亡り。學生の獨學用として、專門用として、辭典として、利せざる處なかるべし。

雖ども、通俗雅馴兩つながら兼ねたる本書の右に出づるものなかるべし。

（四版）日本文學辭典 全 正價壹圓八拾錢 郵税八

（再版）日本哥謠類聚 全 正價壹圓一拾錢 郵税拾六

增補合本 謠曲通解 全 正價壹圓八拾錢 郵税六百目

和文學史 全 正價壹圓四拾五錢 郵税八

三版 作文寶 全 壹冊

（本書の價値）

▲▲總皮本緞金文字入 正價前金二圓廿五錢

作文寶典の價値は作文の標準を明示するに在り、詠歌の作法を解せしむるに在り。

方四百餘頁に亡る、模範を與ふるに在り、文學の趣味を解せしむるに在り。

其說は明瞭。

一定の歌合絹者の參考となる、文學者必讀の書、寶典の名其實に背かず。

（五版）散文韻文 雪月花 全 正價壹冊 郵税六

作文寶 全 正價壹冊 郵税拾五錢

新撰 假名遣活法 全 正價壹冊 郵税四 五錢

合本 歐米名家詩集 全 正價壹冊 郵税 參拾錢 八

發兌元 博文館

日本大文學史卷の三目次

第四編　近古の文學

第六期　鎌倉時代

第四十章　概說……一

第六期の區域——文學武家に移る——鎌倉言語起る——豐富自由の文學時代來る——歌謠的の文章あらはる——文學の維持者——佛教的文學

第四十一章　當期の言語文章……六

語勢の變化——武人的用語——音便と諸音——漢文直譯の口調——佛語と佛脫

第四十二章　謠物と語物……一七

語物の起原——平——謠物——謠物として見るべき散文

第四十三章　軍物語と他の散文……二〇

保元物語――平治物語――源平盛衰記――平家物語――以上四種物語の異點――義經記――曾我物語――撰集抄――方丈記――今物語――古今著聞集――十訓抄――辨內侍日記――十六夜日記……二三

第四十四章　漢文類似の和文

俗語と佛語――東鑑――男子書簡文の起原

第四十五章　和歌の狀態……二六

新古今和歌集と後鳥羽上皇――和歌所――新勅撰和歌集――續後撰――續古今和歌集――續拾遺和歌集――新後撰和歌集――玉葉和歌集――續千載和歌集――續後拾遺和歌集――夫木和歌抄――諸家の家集

第四十六章　著名の作者

西行法師……三七
寂蓮法師……四一
藤原俊成……四二
式子內親王……四五
藤原良經……四六
鴨長明……四六
俊成の女……四八
宮內卿……五〇
下野……五一
源實朝……五一
藤原雅經……五二
慈鎭和尙……五二
藤原家隆……五四
藤原定家……五六
橘成季……五八
藤原信實……五八
辨內侍……五九

藤原爲家……五九
阿佛尼……五九
藤原爲氏……六〇
藤原爲相……六一

第四十七章　散文の作例

江口の遊女(西行法師)……六二
末葉のやどり(鴨長明)……六七
軍評定(作者しらず)……七四
待賢門の戰(作者しらず)……八〇
七騎落(作者しらず)……八七
屋島合戰(作者しらず)……九二
宇治川合戰(作者しらず)……一〇〇
武藏坊辨慶(作者しらず)……一〇九
日記の內(辨內侍)……一二〇

深雪の朝(橘成季)……一二五
三千三百三十三度の拜(橘成季)……一二八
八幡太郎(作者しらず)……一二九
道の面目(藤原信實)……一三三
垣ほにはへる(同上)……一三四
紀行の內(阿佛尼)……一三五

第四十八章　韻文の作例

新古今和歌集五十二首……一四三
新勅撰和歌集十九首……一五五
續後撰和歌集十一首……一六〇
續古今和歌集十三首……一六二
續拾遺和歌集六首……一六五
新後撰和歌集十首……一六六
玉葉和歌集十四首……一六九

續千載和歌集六首……一七二
續後拾遺和歌集六首……一七三

第七期　足利時代

第四十九章　概　說……一七五
第七期の區域——暗黑時代——暗黑中の光明——戰國時代の餘弊——秘事傳授

第五十章　言文の親睦……一八〇
言語思想の自由——言文一致體——職人謠歌合の歌詞——能の狂言の詞

第五十一章　當期の名作……一八四
增鏡——徒然草——神皇正統記——太平記——其題號——其作者——御伽草子

第五十二章　和歌の狀態……一九〇
和歌の衰運——風雅和歌集——新千載和歌集——新拾遺和歌集——新後拾遺和歌集——新續古今和歌集——新葉和歌集——諸家の家集——連歌——連歌師

第五十三章　歌謠の進步……一九七
小唄——宴曲——曲舞

第五十四章　謠曲の成立……二〇五
能の名稱——能の起原——猿樂役者——室町將軍と觀阿彌及び世阿彌——幕府の式樂——能の作意——能の作者——五流の起原——豐太閤と能——謠曲の特長

第五十五章　滑稽の文學……二一二
能と狂言——狂言は滑稽的文學の開祖——狂言の妙處

第五十六章　著名の作者……二一八
藤原爲兼……二一八
藤原爲世……二一八
兼好法師……二一八
北畠親房……二二一

頓阿法師……二二二
正徹……二二三
一條兼良……二二四
三條西實隆……二二四

第五十七章　散文の作例

承久の亂(作者しらず)……二二五
四季(兼好法師)……二二九
仁和寺の法師(同じ人)……二三二
まずほの薄(同じ人)……二三四
平治の亂(北畠親房)……二三七
阿新丸(作者しらず)……二四一
吉野軍(作者しらず)……二四九
物草太郎(作者しらず)……二五六
一寸法師(作者しらず)……二六〇

第五十八章　韻文の作例

其一　謠曲
松風(作者しらず)……二六二
攝待(作者しらず)……二七一
其二　短歌
風雅和歌集十四首……二八三
新千載和歌集二首……二八六
新拾遺和歌集七首……二八七
新後拾遺和歌集十首……二八九
新續古今和歌集十二首……二九一

日本大文學史卷の三目次終

日本大文學史　卷の三

大和田建樹著

第四編　近古の文學

第六期　鎌倉時代

第四十章　概說

第六期の區域——文學武家に移る——濫用言語起る——豐富自由の文學時代來る——歌謠的の文章あらはる——文學の維持者——佛教的文學

第六期の區域

右大將頼朝の幕府を鎌倉に開きし後鳥羽天皇の御宇に起りて。南北朝の頃までを第六期とす。すなはち保元平治以來戰後の結果として。文學こゝに一變し。政權武門に移ると共に。文學また武家に縋ぼれ。從つて僧家の手に育てられつゝあるの時代なり。

文學武家に移る

藤原氏衰へて平家起り。平家亡びて源氏榮ゆ。こゝに於て世は一新せり。文學ひとり紫式部時代のまゝに留まるべからず。況んや社會を風靡するもの。公卿にあらずして武人となれるの時勢に遭遇せるをや。

されば昨日弓矢を執つて軍功を爭ひしもの。今日は文筆を握つて政事を議する事となりたれば。むつかしき和漢の學問は。此間に行はるべからず。高尚なる古今の文章は。學ばんとしても力及ばず。さりとて無學は無學ながらに思想を述べ。感情をあらはす器械は無かるべからざるが故に。やう〳〵言文の親密を來し。俗語にも方言にもあれ。遠慮用捨なしに之を用ふる事こゝ出で來にけれ。

是れ中古の文章が。唯美しき花鳥風月的の裝飾文字に傾きたる深窓の眠を覺まし。まず〳〵進んで民間文學を興させんとするの警鐘ともいふべく。その利益の莫大なるは言を待たざれども。惜しむべきは其中央に立つもの古語に達せず。古學に通ぜざりしも少なからざりしが爲め。或は聞きかぢりの古言を誤用し。りの弊は意思の薄弱なる學者社會にまで及ぼしたるもの無きにしもあらざりき。されば其警鐘に驚かされて。深夜の迷夢を破りたる傍には。

濫用言語起る

狼狽して寢ぼけたる姿を笑はれたるもありしとや言はまし。濫用言語の起りたるなど是れ其一例なり。

潮流の向ふところは。獨り武家文學にのみ止まらずして。貴族を襲ひ僧家を襲ひ。つひに天下の文學を襲ひ盡したり。然れども人はおの〳〵馴れて久しき我境界を頑守すると。めづらしき他の境界を羨望するとの兩性質を。併せ有ち居るものなれば。貴族社會は依然とかの中古文學を保守しながら。更に武家社會の新文學をも入れんとし。武家社會は通俗文學を食としつゝ。貴族文學に服裝を借らんと望むに至りぬ。

豐富自由の文學時代來る

されば上は下に親しみ。下は上に親しみつゝ。文武和合し雅俗一致して。以て此言語に富み。思想に富み。種類に富み。著作に富みたる自由自在の文學時代を作り出だせるは。これを文學史中の光明なりと謂はざるを得んや。頑冥なる學者或は此時代を嫌ひて文學の亂世なりと稱す。取りも直さず中古の文學に泥みて其變遷進歩を嫌へるのみ。區域の狹き文學を欲して自由自在の

文學を欲せざるのみ。中古の人にて止まばさてありなん。同じく明治文學の祖先をなすもの。何れにか愛憎の念を隔つべき。況んや近きは遠きよりも密に。自由自在は萬籟一律の窮屈なるよりも贊成者多きをや。

歌謠的の文章あらはる

言語の親密に次ぎて近世時代を蓋ひしものは。歌謠口調の文章。いひかふれば。謠曲口調もしくは淨瑠璃口調の文體と。佛教的思想となり。戰爭うちつゞく世には。武人は武藝を練り腕力を研くの暇あらざる。また文を讀み文を味ふに力及ばず。わが身に緣故なき古今の話よりも。わが身に親しき名將勇士の傳說。名高き合戰の本末などこそは。何よりも先づ之を聞かんとし。聞いて之を面白がるは當時一般の人情なり。さればとて歷史記錄に就いて讀み習はんも。敎育あまねからざる時代の武士兵卒には。頗る煩らはしき感あるべし。此に於て。聞いて樂しく讀んで耳に入り易きものを需要するに至る。かの口調よくして耳を歡ばせ。文字たやすくして目を勞せしめざる軍物語の出でたる。偶然にあらざるなり。

武家は軍政の權を握りて天下に臨みたれども。未だ王朝時代の文學を再興す

文學の維持者

るの暇なく。在朝貴族は之を失はざれども。政權と共に衰微して。遂には維持しがたからんとするに至りぬ。かゝる時勢の外に立つて。矢叫びの聲も知らずがほに。學窓の燈を挑ぐるものは。僧徒のみ。京都五山の僧徒こそ。戰時もしくは。戰後の社會にありて。わが文學者の維持者たり奬勵者たりしなれ。

佛教的文學

されば公家と武家との別なく。文學の事としいへば智識を僧徒に仰ぎ。記錄を僧徒に託する世なりしかば。僧徒は得たりかしこしと得意の佛法を漢學に調合し。名將勇士の來世にさへ附會して說き弘めんとす。公家貴族は中古以來すでに隨喜渴仰の信徒たり。武士は表にこそ殺伐を事とすれども。裡には無益の殺生を懺悔して。せめてもの罪ほろぼしと。剃髮入道する世の中なり。之に說くに其好む軍物語を以てし。之に勸むるに耳れもしろき口調の文章を以てす。いかでか聞くともなしに。佛說を會得せざるべき。戰爭と佛敎と。相離るゝ遠きものが。互に手を引き合ひて當時の文學を發達せしめしは。これがためのみ。

第四十一章　當期の言語文章

語勢の變化――武人的用語――音便と詰音――浜文直譯の口調――佛語と佛說

讀者の耳なほ中古の文章を記憶し居るべし。紫式部はいかに。

風あらゝかに吹き。時雨さとしたるほど。涙も爭ふ心地して。雨となり雲とやなりにけん今は知らずと。うち獨ごちて。つらづゑつき給へる御さま。女にては見すてゝなくならん魂。必とまりなんかしと。色めかしき心地に打ちまもられつゝ。近うついぬ給へれば。しどけなう打ち亂れ給へるさまながら。紐ばかりをさし直し給ふ。

と書きしにあらずや。清少納言はいかに。

しばしありて。さき高う追ふ聲のすれば。殿まゐらせ給ふなりとて。散りたるものども取りやりなどするに。奥に引き入りて。さすがにゆかしきなめりと。御几帳のほころびより。わづかに見入れたり。大納言の參ちせ給ふなりけり。御直衣さしぬきの紫の色。雪にはにてをかし。

と書きしにあらずや。その優美婉麗なる。あたかも遲々たる春の日に櫻を見る心地もせられしかな。

さて世は保元平治以來しば〳〵の戰亂を經たりし第六期にありては。文勢語調いかなる變遷をか生じつる。味はゝまほしき事ならずや。

義朝これを見て。惡源太は無きか。信賴といふ大臆病人が。待賢門をば早破られつるぞや。あの敵追ひ出だせと宣ひければ。承り候ふとて駈けられけり。

續く兵には鎌田兵衛。云々。以上十七騎。くつばみを並べて馳せ向ふ。大音聲をあげて。此手の大將は誰人ぞ。名乘れ聞かん。かう申すは清和天皇九代の後胤。左馬頭義朝の嫡子。鎌倉の惡源太義平と申す者なり。生年十五歲。武藏の大藏の軍の大將として。伯父帶刀の先生義賢を討ちしよりこのかた。度々の合戰に一度も不覺の名を取らず。年つもつて十九歲。見參せんとて。五百騎のまんなかへ割つて入り。西より東へ追ひまくり。北より南へ追ひまはし。縱ざま横ざま十文字に。敵を颯と蹴散

らして。半武者どもに目な懸けそ。大將軍と組んで討て。櫨匂の鎧に蝶の裾金物打つて。黄月毛の馬に乘つたるこそ重盛よ。押しならべて組んて落ち。手捕にせよと下知すれば。大將を組ませじと。防ぐ平家の侍ども。與三左衛門新藤左衛門を始として。百騎ばかりが中にぞ隔たりける。」

惡源太を始として。十七騎の兵ども。大將軍に目をかけて。大庭の椋の木を中に立てゝ。左近の櫻右近の橘を七八度まで追ひ廻して。組まん組まんとぞ揉うだりける。

十七騎にかけたてられて五百餘騎。叶はじとや思ひけん。大宮表へ颯と引く。大將左衛門佐は。弓杖ついて馬の息をつかせ給ふ處に。筑後守つと參りて。曩祖平將軍の二たび生れかはり給へる君かなと。向ふざまに擧め奉れば。今一度かけて家貞に見せんとや思はれけん。前の五百餘騎をば留めおき。新手五百餘騎を相具して。又大庭の椋の木まで攻め寄せたり。

又惡源太かけ向ひ。見廻して言ひけるは。只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こう洩すとも。今度に於ては餘すまじ。押しならべて組みて捕れ。つはものどもと下知すれば。勇みに勇みたる十七騎。我先にと進みければ。今度は難波次郎。同じき三郎。妹尾太郎。伊藤武者を始として。百餘騎が中に隔たるに事ともせず。惡源太弓をば小脇に掻挟み。鎧ふんばりつゝ立ちあがり。左右の手を擧げ。幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。よれや組まんといふまゝに。先の如く大庭の椋の木の下を追ひまはして。五六度までこう揉うだりけれ。重盛組みぬべうもなくや思はれけん。又大宮表へ引いて出で。惡源太二度まで敵を追ひまくり。弓杖ついて馬に息をつかせけるに。義朝これを見て。須藤瀧口を以て汝が不覺に防げばこう。敵たび〳〵駈け入るらめ。あれ速に追ひ出だせと。言ひ遣はされければ。俊綱馳せて此山をいふに。承り候ふ進めやものどもと。色もかはらぬ十七騎。大宮表に駈け出でゝ。敵五百餘騎が中へ。面も振らず割つて入り。引き立つたる勢なれば。

馬の足を立てかねて。大宮を下りに二條を東へ引きければ。我子ながらも義平はよく駈けたるものかな。あゝ駈けたりとぞ褒められける。

大將重盛。與三左衛門景安。新藤左衛門家泰。主從三騎駈け離れ。二條を東へ引かれければ。惡源太鎌田に屹と目合はせて。こゝに落つるは大將とこそ見れ。歸せやとて追つかけたり。

既に堀川まで追つ詰めけるが。弓手の方に材木多く滿ちくたるに。惡源太の乘り給へる馬。片なつけの駒にて。材木にや驚きはん。馬手の方へけしとんで。小膝を折つてどうと伏す。鎌田兵衛のばさじと。十三束取つてつがひ。よつぴいてひやうと放つ。重盛の射向の袖に。はたとあたつて飛び返る。やがて二の矢を射たりければ。押附に丁とあたつて。のかづき碎けて躍り返れり。

惡源太これは聞ゆる唐皮といふ鎧ござんなれ。馬を射て落ちん處を討て。と下知せられければ。又よつぴいて追ひかけざまに。笘の隱るゝほど射こみたり。馬は屏風をかへす如く倒るれば。材木の上にはねおとされ。兜も落ちて大童になり給ふ。

鎌田堀川を馳せ越えて。重盛に組まんと落ち合ひ。重盛近づきては叶はじとや思はれけん。弓の弭にて鎌田が兜の鉢を丁と突く。つかれてゆらゆる間に。兜を取つて打ち着つゝ。緒を強くこうしめられけれ。（平治物語）

語勢の變化

これを讀んで先づ第一に感ぜらるゝは。戰亂の世に育てられて語勢の急になれるなり。言ひかふれば。雲の上の春を專にせし女性的のものは。今や弓矢とつて戰場に打ち向ふ男性的のものとなれるなり。見よかの。めての方へけしとんで。小膝を打つてどうと伏す。鎌田兵衛のばさじと。十三束とつてつがひ。よつぴいてひやうと射る。重盛の射向の袖に。はたとあたつて飛び返る。の如き文章。いかでか之を中古に求め得べき。紫式部清少納言。これより筆の下れるにはあらず。かゝる語勢を用ふるの必要なかりしなり。近くは日清戰爭中の記事を讀まば。出來事のために育てられたる文章沿革の例證を。目前に知り得るに足りなん。

湯淺常山の文會雜記に曰く。君脩云ふ。太史公が書を見るに。軍の事きつたりはつたりといふが精しく見えず。司馬遷は前漢にても。高祖の世を去る事よほど遠きゆゑ。きつたりはつたりの事。詳に知らざるや。それより後の史實錄に。日本の軍物語の如き事かつて見えず。是は如何なる故にや。文人は武事を知らず。又武功をば亂末の事と思へる故にや。きつたりはつたりの業の見えたるは左傳のみなり。左丘明は其時分文武いまだ分れぬ內ゆゑ。直に車に乘りて軍にも出られたる故かと云へり。と。近古文章の活劇りのまゝなるは。時勢の與へたる賜ものとはいへど。抑も又りの時に筆執る人のあらざりせば。かゝる名文をいかでか見得べき。文學史中ことに特筆大書すべきは。當期軍物語の作にこそあれ。

武人的用語

次には合戰の事を記すとして必要なる軍人專用の言葉。若しくは武裝を形容せる言葉などの。文中に盛にあらはれ來れるを見る。即ち逃ぐる事を「のぶる」と言ひ。左右を弓手馬手といふの類は前者に屬し。是は前文の外ながら。

基盛宇治へ向ふに。白靑の狩衣に。淺黃糸の鎧に。上折したる烏帽子の上に。白星の兜を著。切符の矢に二ところ籐の弓持ち。黑馬に黑鞍おいてゞ乘つたりける。（保元物語）

といひ。

左衛門佐重盛は。生年二十三。今日の軍の大將なれば。赤地の錦の直垂に。櫨匂の鎧。蝶の裾金物打つたるに。龍頭の兜の緒をしめて。小烏といふ太刀を佩き。切符の矢負ひ。重籐の弓持つて。黃月毛なる馬に。柳櫻摺りたる貝鞍おかせて乘り給へり。

といへるが如きは。後者に屬す。共に中古の人の筆には載せられざりしものずかし。

又かの「鎧ふんばりつゝ立ちあがり」といひ。「おもてもふらず割つて入り」といひ。「よつぴいてひやうと放つ」といひ。「ござんなれ」といひ。「採うだりけり」といへるが如き。音便多く詰音多く。俗語のまゝに書きたるもの少なからず。是れ實に言文の親密を謀れる無二の媒介者にして。當時の筆者もし之を避けたらんには。謂はゆる切つたりはつたりの合戰を。いかでか目に見る如くには記し

音便と詰音

得ん。明治今日の文人たるもの。既往に鑑みて。よく〳〵思をめぐらすべきなり。

漢文直譯の口調

今一つは漢文直譯の口調を捕へ來りて。巧に我文に移し用ひたるもの。すなはち。

祇園精舍の鐘の聲。諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色。盛者必衰の理を現はす。驕れるもの久しからず。只春の夜の夢の如し。猛き人も遂には亡びぬ。偏に風の前の塵に同じ。遠く異朝をとぶらふに。秦の趙高。漢の王莽。梁の周伊。唐の祿山。是等はみな舊主先皇の政にも從はず。樂を極め。諫をも思ひ入れず。天下の亂れん事をも悟らずして。民間の憂ふる所を知らざりしかば。久しからずして亡じにしものどもなり。（平家物語）

の如き。

さらば本文に曰く。君は至つて尊けれども至つて親しからず。母は至つて親しけれども至つて尊からず。父のみ尊親の義を兼ねたりと知んぬ。

母よりも尊く君よりも親しきは。たゞ父なり。如何ぞ之を殺さんや。（保元物語）

の如き出づ。後世かゝる文體を多く好むやうになりぬるは。此頃の文章や其先達としての誘導者なりしならん。

佛語と佛說

次に佛語を加味し佛說を附加する事の盛になりたるは。りの原因すでにいへるが如し。見よ〳〵。

七月二日終に一院かくれさせ給ひぬ。御五十四。いまだ六十にも滿たせ給はねば。猶惜しかるべき御命なり。一天くれて日月の光を失へるが如く。萬人歎きて父母の喪に遭ふに過ぎたり。云々。有待の御身は。貴賤も高卑も異なる事なく。無常の境界は。刹利も首陀もかはらねば。妙覺の如來なほ因果の理を示し。大智舍利弗また先業をあらはす事なれば。凡下の驚くべきにはあらねども。去年の御歎に今年の御悲の重なりけるを。如何せんとぞれぼしめしける。（保元物語）

といひ。

二位殿は日頃より思ひ設け給へる事なれば。鈍色の二つぎぬ打ちかづき。練袴のそば高く取り。神璽を脇に挾み。寶劍を腰にさし。主上を抱き參らせて。云々。波の底にも都のさぶらふぞと。慰めまゐらせて。千尋の底にぞ沈み給ふ。悲しきかなや。無常の春の風。たちまちに花の御姿を散らし。痛ましきかなや。ぶんだんの荒き波。玉體を沈め奉る。殿をば長生と名づけて長きすみかと定め。門をば不老と號して老いせぬ關とは書きたれども。未だ十歳の内にして底の水屑とならせおはします。十善帝位の御果報。申すも中々おろかなり。（平家物語）

といへるが如き。いかに文學が佛者の手に育てられつゝあるかを。好みて對句を用ふるも此頃の流行にして。上古にはありしかど。中古には殆ど跡を絶ちたる如き有樣なりしぞかし。

以上述べたる處を以て第六期にあらはれたる要點とす。なほ作例に就きて一々これを調査せば。面白き事も多からん。とにもかくにも自由自在の通俗文學を鼓舞せしものは。戰時の結果として遺されたる人心の變遷にぞあるべき。

語物の起原

平家物語

第四十二章　謠物と語物

語物の起原――平家物語――謠物として見るべき散文

神樂催馬樂の類は神聖の雅樂と爲りて貴族の間に行はれ。今樣なる新曲の謠物いでゝ民間にもてはやされたるは。中古の末期に認められたる事實なりき。然れども是等の謠物なるものは。歌ひぶりの曲節これが主となりて。寧ろ歌とし文としての意味は從たるものなれば。うの言葉節に過ぎて。未だ聽者の耳を滿足せしむるに足らざる處やありけん。歷史傳記を面白く語るといふ事おこりぬ。

語るとは。謠ふといふ程にこそなけれ。多少の曲節を附けて。語調或は强く或は弱く。或は緩に或は急に朗讀するをいふ。名づけて語物といへり。うの率先者は平家物語なりき。

吉田兼好の徒然草に曰く。後鳥羽院の御時。信濃前司行長。稽古の譽ありけるが。云々。この行長入道。平家物語を作りて。生佛といひける盲目に敎へて語らせけり。さて山門の事を殊にゆゝしく書けり。九郎判官の事は委しく

知りて書き載せたり。滿冠者の事はよく知らざりけるにや。多くの事どもを記しもらせり。武士の弓矢のわざは。生佛東國のものにて。武士に問ひ聞きて書かせけり。かの生佛が生れつきの聲を。今の琵琶法師は學びたるなり。と。

そも〳〵此語物の祖たる平家物語は。その文體いかにといふに。韻文散文相半したるやうのものとや言はまし。こゝに少しく引きて示さん。

壽永二年三月上旬に。木曾の冠者義仲。兵衛佐頼朝。不快の事ありと聞ゐけり。さるほどに鎌倉の前の兵衛佐頼朝。木曾追討のためにとて。其勢十萬餘騎にて。信濃の國へ發向す。木曾は其頃横田の城にありけるが。其勢三千餘騎にて城を出でゝ。信濃と越後との境なる。熊坂山に陣を取る。兵衛佐も同じき國の内。善光寺にこそ着き給へ。

これは散文の處なれども。おのづから口調とゝのひて。このまゝにも謠はゞ謠はるべきは。誦し味はひて知るべきなり。

語物として見るべき散文。

さる程に九月も十日あまりになりぬ。萩の葉むけの夕嵐。ひとり丸寐の

床の上。片敷く袖を絞りつゝ。更けゆく秋のあはれさは。いづくもとはいひながら。旅の空こそ忍びがたけれ。九月十三夜は名を得たる月なれども。其夜は都を思ひ出づる涙に。我から曇りてさやかならず。九重の雲の上。久方の月に思をのべし夕も。今のやうに覺えて。云々。

これは韻文を爲したる處なれども。前後は散文と相接したり。されば全體を通じて。語らるべく或は謠はるべく作りなしたる散文ともいふべく。又は字句の用法に變化多き韻文なりともいふべきか。

平家物語一たび出でしより。世は風靡して其文章の語物と否とを問はず。大かた此文體を用ふること流行となりぬ。是れ既にいへる戰後の人情として。聞くに面白く誦するに容易き文章を。歡迎する世の中なればなりけり。

然れどもかゝる文體の起りたるは。獨り平家物語の功にのみは歸せしむべからず。大に之を渴望しつゝある世に促されて出でたるべければなり。されば平家の前に平家の文體なかりしにあらず。たゞ時に投じて光燄萬丈の大文字を示したるの功は。永世忘るまじきなり。

讀者は上古に於て。散文の韻文めきたる事を學びしならん。文字なかりし世の朗讀文。れのづから然らざるを得ざりし事は既に述べつ。今や文字はあれども讀むよりは聞く人多き世の文章。また上古に似て來しも自然のことわりならずやは。されど彼は彼。此は此。語調句勢おのづから異なるは。時と人とを遙に隔てたればぞかし。

保元物語

第四十三章　軍物語と他の散文

保元物語——平治物語——源平盛衰記——平家物語——以上四種物語の異點——義經記——曾我物語——撰集抄——方丈記——今物語——古今著聞集——十訓抄——辨內侍日記——十六夜日記

かの語物として作られたると然らざるとの別なく。謂はゆる軍物語の文章こそ。第六期を代表して光明赫奕たらしむる作にはあれ。

保元物語は。保元の亂の始末を記せる物語なり。作者は葉室大納言時長なりともいひ。中原師梁といひし人なりともいふ。

平治物語

平治物語は平治の亂の始末を記せる物語なり。是も葉室時長の作といふ說あれども。二書ながら詳ならずといふを事實とすべし。共に其文の雄々しくして。さしもに込み入りたる戰亂のさまを。目に見る如く書きこなしたる筆づかひ。讀み味ひたる人は之を知るらん。

源平盛衰記

源平盛衰記は。源平二氏の戰爭を本末くはしく記せる物語なり。作者は是をも時長といへど。詳ならざる事。前の二書に同じ。

平家物語

平家物語の事は前章にいへり。然れども作者に就きては。かの信濃前司行長を始として。爲長卿。葉室時長。吉田資經。源光行。願敎法師など。異說さまく〳〵なり。何れに據るべきかを知らざれども。兼好の說こう普くは世に知られたれ。

以上四種物語の異點

この盛衰記と平家とを前の二書に比ぶれば。保元平治は質素にして。盛衰記は華美潤飾に傾き。平家は流調に妙を得たるの差あり。或は曰ふ。平家は盛衰記を本として之を取捨し。異說をも加へて語物に適するやう作りかへたるならん。と。

義經記
曾我物語

此外に義經記と曾我物語との二書あり。甲は九郎判官の一代記。乙は曾我兄弟復讐始末の實錄なり。是は編年體の軍物語にあらずして列傳體の軍物語ともいふべきか。文また或は悲憤に或は勇壯に。上の四書より下るべくもあらず。豈こゝに數へもらすべきものならんや。作者は例の詳ならず。

撰集抄
方丈記
今物語
古今著聞集
十訓抄
辨內侍日記
十六夜日記

其他の散文は西行法師の撰集抄。鴨長明の方丈記。藤原信實の今物語。橘成季の古今著聞集。作者知らずの十訓抄。辨內侍の日記。阿佛尼の十六夜日記など。第六期の代表者として世に名を知られし作なり。

撰集抄は壽永年中讃州善通寺に於て作れりと言ひ傳へたるもの。僧徒の逸事を物語體に記し集め。方丈記は記者の日野山に庵むすびたる顚末を自記せしもの。今物語は當時歌人の奇談珍話を隨筆體に書き。著聞集は其道々の名高き物語を分類して列ね。十訓抄は教訓的の話を主とし。辨內侍日記は作者が後深草院に仕へ奉りし頃の日記にして。十六夜日記は鎌倉に下りし道の記なり。枯梗の如きあり。萩の如きあり。薄の如く丈高きあれば女郎花の如くなまめきたるあり。とり〳〵に拾つべき色香も見ぬず。謂ふ勿れ冬近からんとする野邊の夕日は。光を弱めつゝ立てりと。

俗語と佛語
東鑑

第四十四章　漢文類似の和文

俗語と佛語——東鑑——男子書簡文の起原

中古は漢學隆盛の時代なりき。政治を執る人。上流に位する人。漢文書き得ぬは殆んど無かりき。故に公用文も書簡文も。多くは純粹の漢文もて綴りたり。今は然らず。戰後の世の中として。漢文かく能はざる人多く。さりとて平假名に書かんも女めきたりとや思ひけん。表面は漢文仕立の如く見ゆる文中に。武人は武家の言語を交へ。僧徒は佛語など交へつゝ。俗語まじりに和文交りに書ける文章行はれ。漢とも付かず和とも付かぬ變文を用ふる世とこそなりにけれ。當時の記錄書簡は。大かた此體なりき。

東鑑は鎌倉幕府の記錄なり。記して曰く。

八日　乙卯　二品。拜御臺所。御參鶴岡宮。以次被召出靜女於廻廊。是依可令施舞曲也。此事去比。被仰處。申病痾由。不參。於身不屑者。雖

不能左右。爲豫州妾。忽出掲焉砌之條。頗恥辱之由。日來內々雖澁申之。彼既天下名仁也。適參向歸洛在近。不見其藝者。無念由。御臺所。頻以令勸申給之間。被召之。偏可備大菩薩冥感之旨。被仰云。近日只有別緒之愁。更無舞曲之業由。臨座猶固辭。然而貴命。及再三之間。懋廻白雪之袖。發黃竹之歌。左衛門尉祐經鼓。是生數代勇士之家。雖繼楯戟之基。歷一鶴上日之職。自携歌吹曲之故。候此役歟。畠山二郎重忠。爲銅拍子靜先吟出歌云。

吉野山　峯ノ白雪　フミ分ケテ
入リニシ人ノ　跡ゾコヒシキ

次歌別物曲之後。又吟和歌云。

シヅヤシヅ　シヅノヲダマキ　クリカヘシ
昔ヲ今ニ　ナスヨシモガナ

誠是社壇之壯觀。梁塵殆可動。上下皆催興感。二品仰云。於八幡宮寶前。施藝之時。尤可祝關東萬歲之處。不憚所聞食。慕反逆義經。歌別曲。奇怪云云。御臺所被報申云。君爲流人。坐豆州給之比。於吾雖有芳契。北條殿。怖時宜。潛被引籠之。而猶和順君。迷暗夜。凌深雨。到君之所。亦出石橋戰場給之時。獨殘留伊豆山。不知君存亡。日夜消魂。論其愁者。如今靜之心。忘豫州多年之好。不戀慕者非貞女之姿。寄形外之風情。謝于時休御憤云云。小時。押出於御衣卯華重於籠中。被纏頭之云云。（東鑑）

洛中群盜蜂起。幷散在武士狼藉事。度々被仰下候之趣。殊驚歎思給候。時政下向之時。東國武士。少々差置候訖。其外も。或爲兵粮米沙汰。或爲大番勤仕。武士等在京事。多候歟。彼輩。不鎭狼藉。還疲計略。若如此事をもや。企候覽。人口難塞候。然者偏可爲賴朝恥辱候。當時親能。廣元。雖在京候。元自非武器候。只閑院殿修造事。致沙汰候計也。如此事。余不可爲彼等不覺候歟。仍常胤。行平を差進候。於東國。有勢者候。之相憑勇士候也。自餘事は。知候はず。於武士等中狼藉は。此兩人。輙可相鎭候。見器量。計進候。能々可被仰付候。條々。以別紙言上候。且

此趣。可令洩披露給候。賴朝。恐々謹言。

八月十九日　賴朝

進上　帥中納言殿

（同書書簡文）

遠く例を求むれば。古事記の書體にやゝ似たる處あり。かの時代は假名の發明なかりし以前なれば可なり。この假名の便利ある世にして。かゝる擬漢文書體の行はれしこそ不思議なれ。後世の「以手紙」「未得貴意候得共」「被下度奉願候」など書く男子の書簡文は。實にこゝに起原を爲したりしなり。

男子書簡文の起原

第四十五章　和歌の狀態

新古今和歌集と後鳥羽上皇

新古今和歌集と後鳥羽上皇——和歌所——新勅撰和歌集——續後撰和歌集——續拾遺和歌集——新後撰和歌集——玉葉和歌集——續千載和歌集——續後拾遺和歌集——夫木和歌抄——諸家の家集

當期の和歌を語らんとすれば。先づ其先達たりし新古今和歌集よりせざるべからず。新古今和歌集は土御門天皇の元久二年。後鳥羽上皇の院宣を奉じて。

參議右衛督通具。大藏卿有家。右近中將定家。前上總介家隆。右少將雅經。僧寂蓮の撰びたるものなるが。總裁の實權は上皇御みづから握らせ給ひしなり。

その時の事を家長日記にしるして曰く。新古今の部類終りて。此四月に侍りき。心もとなく思召して。先づ中がきばかりにて行はる。去年の神無月の頃より。和歌所にて寄人たち召し集めて。辰の時ばかりより日の暮るゝまで。手もたゆく或は書き或は切り續ぎ。心の暇もなし。すべて此歌撰ばせ給へるさま。ことに毛を吹き疵を求めらる。五人の撰者おの〳〵撰じ上げて後。こと〴〵く御覽じとほして。其中にさもあるを御點ありて。左近將監清範かきいだして後。うれを又御覽じて。三度まで書き出ださる。誠に人がらの高く下り。賢く愚なるにもあらず。たゞ歌の體を先として。なか〳〵數ならぬ片山寺の法師ばらなどまで。此道に巧なるは。おのづから漏れざるも侍るべし。うの五人の撰者べち〳〵に御點を書き出だしたるを。よせて一つに部類せられしかば。さばかり所せげなる事侍らず。すべて二千首に及べるを。うこら

御覽じかへさせ給へれば。みな此歌どもを御心の內に浮べさせ給へるゞ。さも有りがたきまで覺ゆさせ給へる。

されどまさしう左程とは思ひ參らせざりしに。試みよと仰せられて。部類したるを二三句取り出だされて。上をば讀め下をば皆仰せられんとて。一卷を引きかへして上を讀みあぐれば。下はことゝくに暗からず。これは理りなる方も侍り。たゞ假に二三度御覽じたる事だに。つゆ忘れ給はず。まして度々よませ給ふとて。よしあしを思召し分けて。いづれか御心の所々に留まらざるべき。昔も例なき撰集に侍れば。さりともと思ひ。歌よみどもの漏れて思ひ〳〵のよすが尋ね。或は歌をよみて添へ。かしこき言葉を盡して申文を書き。かたゞ〳〵より申しあへるさま。ことに雨の足よりも繁し。云々。と。上皇が深く歌道に御心を寄せさせ給ひ。此集の御撰に御力を入れ給ひし一斑。これにて窺ひ知らるべし。

和歌所

和歌所といふは。この新古今の院宣に先だつ六年。院中に置かせ給ひしもの にして。謂はゆる和歌講究所なりしかば。新古今もこゝにて撰ばせ給ひしは

前文にも見ゆるが如し。同じ家長日記に曰ひけるは。

建仁ことしは和歌所とて始めて置かる。二條殿の廣御前つくり改む。二間落板敷になして殿上人の座とす。平板敷をして地下の座とす。寄人とて定め置かる。攝政左大臣。內大臣。有家朝臣。通具朝臣。家隆。定家朝臣。具親。雅經。沙彌寂蓮。沙彌釋阿。云々。はじめは此人たちなり。後に隨信朝臣。地下に鴨長明。藤原秀能めしくはゝる。又さるべき人々兩三人侍るよし申す人々侍れば。攝政殿三位入道問はれ侍りき。皆めさるべきよし申させ給ひしかども。などやらん沙汰もなかりき。云々。

着到して月毎の晦日に月奏まゐらせなどして。上日を爭ひあへり。雪月花のをり〳〵は催されず。御心あひ給はねば。おのづから出で給はぬをりは。私のうこはかとなき口ずさみさへ多かれば。此道の廢たれぬ謀なり。

歌の試み此にて侍りき。廿餘人めしあつめて。東の廂の上に攝政左大臣殿內大臣殿さぶらはせ給ふ。大床にて東を上にて並びゐたり。御簾の內より題十首出ださる。これらは皆人の書きたれば記さず。其中にすぐれて歌めされな

どする人もあるべし。寄人たち絶ねず候へば。ひまなき和歌の會侍れども。さのみ書きとゞめず。と。

此日記の筆者は和歌所の開闔に補せられ。專ら其任に當るの人なりしかば。その事實の誤なきは知るべきなり。さても上皇は政に御暇なき御身を以て。かくまで御手を下し御心を碎きて。斯道を奬勵せさせ給ふ御志。かたじけなしなども世の常ならずや。

あはれ斯くながらこそ。千代に榮行く歌道の將來を仰ぎ望まんとせしは。當時貴賤の心なりもを。悲しいかな。思はずも世は亂れて承久の變となり。上皇は遠島へ御幸あらせられ。再び都には寂寞を繼ぐ人なくて止みぬるこそ。かへすゞも口をしけれ。さるにても將に眠らんとせし和歌を一新して。範を後世に垂れたるは新古今の功にあらずして何ぞ。かたじけなくも上皇の御遺德仰ぎ奉らざるを得ざるなり。上皇また歌道を說かせ給ひし御作あり。名づけて後鳥羽院御口傳といふ。

石原正明の尾張の家苞に當期の和歌を評して曰く。新古今集の頃の歌は。一首の口調をめでたく調ふる事を本意として。詞の上に心をのこして餘韻を深くこめ。一首のつゞけざま幽玄にして。あらはに淺まなる所なく。情を深うし語勢をいたはり。たけ高くもしめやかにも。强くも和らかにも。百般の姿あり。唯しほ〳〵くたゞ〳〵とするを嫌ひて。詩人の謂はゆる雄健流暢豪壯新奇といふ調べを。常に思ひためり。

かの新奇なるあまりに。こまやかに理りをいはゞ。少しいかにぞやと思はるゝふしなきにしもあらねど。それはた瑕ありとも玉とならん事を願ひて。全き瓦を思はざりしものなり。

この姿は文治より建保までの諸先達の後。地を拂ひて見ねず。爲家卿なん當時の名匠にて。世にゆるされたる歌よみながら。秀逸拔群なる歌は一首もなく。只じほふに凡樣なるのみにて。綠の詞など取り集め。上下かけあはずる事をし覺にて。終身一律の全き瓦なり。さるわざはまねびやすきけにや。末代この風のみ多し。

本居先生は古學者にて。萬葉以下の書に熟してめでたき才學なれば。拔群の

論もあるべきを。かの懸合などいふ事に泥みて。此集をしも論ぜられたる事なれば。盥の水もて四大海の潮を論ずるが如く。いたく堺を隔て氣慨くだり。上下の懸合。縁の詞の配當を規矩にしたるは。爲家卿の創立なれど。なほ爲兼卿に爭はんと爲世卿の執したる事にて。この集の縱横磊落なるに。日を同じくしていふべき事にあらず。と。

新勅撰和歌集

あゝ新古今時代の盛なりし事かくの如し。然れども月滿つれば缺け花盛なれば散る。この集の作者一たび新調を出だされしより。次々の勅撰いたづらに之を摸倣するのみにて。古今萬葉の古體に遡らんとするの勇氣なく。さりとて更に自家の新調をよみ出ださんとするの見識もなく。遂に新古今の精神を學ぶ能はずして形のみを寫すに至り。此道やう〳〵弛まんとす。さはいへ猶名人のなきにはあらず。時世の移ると共に。れのづから沿革をなすべき風調の味はふべきあるは。次々に示す作例を讀みて知られなんかし。

新古今の次には新勅撰和歌集出づ。後堀河天皇の貞永元年にして前中納言定家これが撰者たり。此集には武士の歌を多く入れたりとて。異名を宇治川集といへりしとぞ。ものゝふの八十氏川といふ歌の詞によりたるなり。かく武士の歌を多く入れながら。後鳥羽土御門順德三院の御製をば一つも載せざりしは。撰者の關東に媚びたるものか。古來これを非難するものこそ多けれ。さはいへ時いまだ新古今を去る遠からずして。見るべき風調はなほ衰へず。今川了俊は花實を兼ねたる集なりと譽め。烏丸光廣は新古今花ずぎたりとて新勅撰を定家のくすみて編まれたりと評せり。

續後撰和歌集

後嵯峨上皇の院宣によりて建長三年に成りたるは續後撰和歌集なり。民部卿爲家之を撰ず。光雄卿口授といふものに。續後撰は初中後。衣冠正しき人を見るやうなり。常に手を放つべからず。など評したり。

續古今和歌集

續古今和歌集また同じ院宣によりて。前内大臣基通。民部卿爲家。侍從行家。右大辨光俊の四人撰びたり。時は龜山天皇の文永二年なりき。

續拾遺和歌集

龜山上皇の院宣によりて成りたるを續拾遺和歌集といふ。後宇多天皇の弘安二年を以て。前權大納言爲氏これを奏上せり。

新後選和歌集

後宇多上皇の院宣によりて成りたるを新後撰和歌集といふ。後二條天皇の嘉

永二年を以て。大納言爲世これを奏上せり。當時これを誘る人は津守集といひたるよし。住吉神官の歌多く入りたるによりてなりとぞ。

玉葉和歌集

續千載和歌集

花園天皇の御宇に成りたるもの二つあり。一は玉葉和歌集にして。伏見上皇の院宣により。正和二年を以て前大納言爲兼これを奉り。二は續千載和歌集にして。後宇多上皇の院宣により。文保三年を以て前大納言爲世これを奉れり。

續後拾遺和歌集

後醍醐天皇の元享三年勅を奉じて。民部卿爲藤の撰じたるを續後拾遺和歌集とす。然れども事半にして爲藤薨ぜしかば。權中納言爲定これを繼ぎ。正中二年を以て奏上せり。

當期にあらはれたる勅撰歌集は右の如し。りの次々に花おとろへ實すくなく爲りたるは。時運の變更。うもく又承久の亂などいふ頃に遭遇したるがためなりけらし。武人の歌おほく加はり來るとはいへど。無氣力のものもて卷を掩はるゝこうせんかたなけれ。

夫木和歌抄

この外私撰の書には夫木和歌抄あり。越前守藤原長清。剃髮して蓮昭といひし人の撰なりき。

後人の旣に曰く。此夫木和歌抄は藤原朝臣長清自撰なり。昔中頃の歌仙の家集。幷に代々の勅撰に漏るゝ和歌を拾ひ集むるところなり。自今以後の勅撰のため。又この道に志あらん人のために。世の喇を顧みず。集め置くものなり。

また夫木抄と名づくる事。今案に非ず。此抄の名を思案して。少しまどろみてありける夢の中に。白衣の老翁一人來つて曰く。汝が撰ずるところの和歌の抄は我朝の重寶なり。末代の證歌なるべし。和國の風俗なれば扶桑集と名づくべしといはれけるを。夢心地に。是は誰人にてわはしますぞと問ひければ。我はこれ和歌の道に心を留めし中納言匡房といふものなりとて。夢さめぬ。

此よしを冷泉黃門爲相卿に申されければ。爲相卿この事希代不思議の靈夢。末代の奇特。まことに我朝の深秘の抄なり。但し扶桑は日本國の總名なれば。りの憚あるべし。扶の字のつくり桑の字の木を取り合はせて。夫木和歌集と

名づけよと。と。

この集に撰び載せたるは。一調子ある歌にして眠氣催す春の日の鶯雲雀とも聞きなしつべし。あはれ此風調に靡かされて。怠りの夢ふき破られたちんには。第七期の希望は黄金の光もて包まれたるべきに。かへす〳〵も惜しむべきは時運の到來なりしずかし。

當期の家集にして見るべきもの八つあり。曰く西行の山家集。曰く俊成の長秋詠藻。曰く良經の月清集。曰く慈鎮の拾玉集。曰く定家の拾遺愚草。同じく員外。曰く家隆の壬二集。曰く實朝の金槐集。中にも金槐集は。下れる世の女々しく萎れたる調べを嫌ひて。古の雄々しく壯なる姿によみ返さんとせし男心みにて。打ち誦するにも愉快かぎりなき作こう多けれ。

加茂眞淵の新學にいはく。鎌倉の大臣(實朝)の歌は。今の京このかたの一人なり。うの體いにしへにかなひたれば。たま〳〵古今歌集の詞と交へ用ひ給ひしすら。似つかず聞ゆるにつけて。本の心も調べもすぐれて高き事知られたり。

諸家の家集

さて此公。「箱根路を我こゆくれば」「ものゝふの矢なみつくろふ」などの世にすぐれたる多かるは。更にもいはず。事もなく聞ゆるに「この寐ぬる朝けの風にかをるなり軒端の梅の春の初花」「玉藻刈る井手のしがらみ春かけて咲くや川邊の山吹の花」などの本のいひなし。且うちある事をわざといはれつる末の調べの心高さを見よ。

また梅開厭雨てふ題にて。「わがやどの梅の花さけり春雨はいたくな降りう散らまくも惜し」とよまれしを思ふに。その頃京に歌よむ人。みなさきごゝろもて。巧にくしつゝずあるらん。いで古へぶりよみて見せんよとて。天の下の歌よみを見下したる心もおのづから見ゆ。と。

第四十六章　著名の作者

西行法師

左衛門尉佐藤康清の子にて。在俗の名を憲清(一說には義清)といへり。弓術に長じ兵法に通じ。兼ねて和歌をよくせしかば。鳥羽上皇は大に其才を愛して

北面の侍となし。從五位下に叙し左衛門尉に任じ給ふ。然れども頻に遁世の志ありて。名利のために身を委せん事を厭ふ心は。常に絶ねざりき。上皇は憲清に授くるに。撿非違使を以てせんとし給ひしに。憲清うの罪人を糺明する職なりとて。固辭して止まざりしかば。上皇ふたゝび之を強ひ給ふ事あたはざりき。

鳥羽の新殿の成れるに當り。上皇は當時の名匠をして。畫障子に記すべき和歌を奉らしめ給ふ。憲清即日命に應じて十首を詠じて奉りしかば。其御恩賞として朝日丸の御劍を賜へり。親戚故舊あつまりて之を榮とし賀したるに。憲清冷遇少しも悅ぶ色あらず。心中すでに厭世的の觀念もて滿たされ居れば なり。

或日一族の左衛門尉憲康と伴ひて院の御所より下りしが。途にて別るゝに臨み。明朝も又同道して出仕せんと約したり。よりて翌日かの憲康を誘はんとせしに。憲康昨夜頓死せしとて。妻子ども泣き悲しむ事れびたゝし。憲清浮世の無常を感ずることいよ〳〵其度を高め。此に斷然意を決し。表を上りて

官を辭す。上皇これを惜しみて未だ許させ給はざりしに。間もなく妻子を捨てゝ家を出で。嶮峨に至りて僧と爲る。是れ實に崇德天皇の保延六年。二十三歲の時なりき。剃髮して始は圓位と名づけしが。のち西行と改めたり。その妻また尼となりて高野に入りしといふ。

是より抖擻行脚に身をやつして。足跡ほとんど六十餘州に遍く。關東西國至るところとして。咳唾を珠玉たらしめざるはなし。

途に東海道を經て天龍川の渡舟に乘る。人多くして舟重ければ。舟人西行を して出でしめんとす。西行知らぬ顏して居たりしかば。舟人竿ふりあげて之を打つ。血ながれて顏を染むれども西行は色をもかへず。しづかに舟を出でゝ去りぬといふ。平生忍耐の强き。この類なりき。

高雄の文覺上人。西行を惡む事甚し。常に曰く。我もし彼を見ば。頭を打ち割らでは止むべからずと。文覺の門徒之を聞き。西行の爲めに危ぶむ事こゝに年あり。一年高雄の法華會に西行來り會し。文覺の坊を敲きて一宿を乞ふ。文覺さてこそ期するところと。拳を摩して待ちぬたるに西行入り來れり。懸

談數刻また初對面の客とも思はれず。翌朝に至り西行の歸るを待ちて。門徒文覺に詰るに。先の言葉に反せしを以てせしに。文覺曰く。あの法師は文覺に打たるべき顏つきにあらず。却りて文覺をこう打たんずれと。

後鳥羽天皇の文治二年。西行鎌倉に至る。時に右大將頼朝鶴岡に社參して。鳥居の邊に老僧の徘徊するを見。梶原景季をして名を問はしむれば。西行なりと答ふ。頼朝喜び歸りて之を招き。和歌および弓馬の道を尋ねしに。西行曰く。弓馬の道は遁世の後皆忘却して。一も心底に留めず。又歌は花月に對して感の動きたるを。三十一字に綴るのみ。何ぞ與儀を究むるに足らん。然れども此恩問に對し。默して止まんも不敬なれば。いさゝか弓馬の事を申すべしとて。辯舌さわやかに演述せり。うの去るに及び。頼朝白銀の猫を賜ひしに。西行拜受して門外に出で。遊び居たる小兒に投げ與へて過ぎぬ。

文治の末京都に歸り住みて。東山雙林寺に庵を結び。花の木を植ゑて歌ひけらく。

願はくは　花のもとにて　我死なん

うのきさらぎの　望月のころ

二月十五日は釋迦入滅の日なればなり。果せるかな一日おくれて。建久九年二月十六日。この庵にて沒せり。年七十三。

家集を山家集といふ。また撰集抄などの著あり。後鳥羽院御口傳に曰く。西行は才思天成にして。常人の學び得るところにあらず。人丸の後身といふべし。と。以て當時に重んぜられしを知るべし。

寂蓮法師

藤原俊成の弟に醍醐の俊海阿闍梨といひし人あり。寂蓮は其人の子なり。されば伯父甥のよしみにて俊成の養子となり。定長とて中務少輔たりしが。實子の定家うまれしかば。自身より退きて出家し。建仁元年沒したり。和歌を以て聞ゆ。

藤原清輔の弟に顯昭といふ僧ありて寂蓮が和歌の友なりしが。彼は博學にして才思は寂蓮に劣り。此は才思に富みて學問は顯昭に勝る能はざりしかば。顯昭つねに寂蓮を嘲りて曰く。和歌の藝は至りて難きものにあらず。其故は

寂蓮不學なれども猶之を能くすと。寂蓮こたへて曰く。天下の藝の能くしがたきもの和歌に過ぐるはなし。其故は顯昭博學なれども猶堪能なるあたはずと。以て其みづから重んぜしを知るべし。

藤原俊成

千載和歌集の撰者たりし俊成は。權中納言俊忠の第三子なり。六條天皇の仁安二年正三位に叙し。高倉天皇の承安二年皇太后宮大夫に任ぜられ。同じ御代の安元二年。六十二歲にして剃髮し名を釋阿と改む。かくて土御門天皇の元久元年に薨ぜり。年九十一。京都の五條室町に住みたる故。世に五條三位と呼ばる。

俊成は和歌を藤原基俊に學びたれども。時としては之に服せぬ事ありき。時に源俊賴は基俊と隙ある中なりしに。俊成しきりに俊賴の風體よきを賞し。而して基俊をば。嘗むるに學力のすぐれたるを以てす。人あり俊成を詰つて曰く。足下は基俊の門下にありながら。かへりて俊賴を賞す。豈禮に悖るなからんやと。俊成曰く。おのれは唯其歌風を慕ふのみ。師たり師たらざるが

爲めにはあらずと。時の人これより俊成の偏頗なき心に服せしとかや。

俊成常に歌よむ時は。古き淨衣を着して正座し。桐火桶を抱きながら心を凝らしてよみいでければ。世人その歌風を稱して桐火桶の姿といへり。

或人りの自讃歌はと問ひたれば。

夕されば　野邊の秋風　身にしみて
　鶉なくなり　深草の里

と答へたり。されど世上にては。

おもかげに　花のすがたを　先立てゝ
　幾重こゝろきぬ　峯の白雲

を稱し傳へしとぞ。

老年の後。耳も目も健全にて。しば〳〵御歌會にも伺候し。後鳥羽上皇の御師範をつとめしかば。御信任も淺からず。土御門天皇の建仁三年。九十の高齡に達したるを以て。むかし光孝天皇の僧正遍昭に賀を賜ひし例により。和歌所に於て之を行はしめ給へり。時は十一月の二十三日。りの時の有樣は。

家長日記に委しく記せるを見よ。

曰く。和歌所の南におまし裝ひて御座とす。東の格子れろして。この屏風一よろひ立てゝ。入道(俊成)の座とす。西の座の上に。攝政殿幷に太政大臣。それにならびて北ざまに公卿さぶらはる。皆直衣なり。殿上人は束帶。入道やゝ待たれて。新三位定家朝臣に扶けられて參上る。たとしへなく老い屈まりあへるに心苦し。世にながらへけるは今日を待たれけると。あはれにかたじけなく見ゐ侍りき。長押をも得のぼりやらでひれふしたりしを。こともの救ひ立てゝ上り侍りし。褥の上に屈まれ居られたりし法服姿。いつ忘るべしとも覺えず。と。

上皇御製あり。

百年の　近づく杖の　世々の跡に
越ゐても見ゆる　老の坂かな

俊成喜に堪へざりけん。詠じけらく。

行末の　よはひはこゝに　君が經ん
千年を松の　かげにかくれて

その榮比するにものなく。此道の名譽こゝに至りて極まれりとぞいふべき。」

俊成常に歌よむ心得を語つて曰く。歌は必ず才覺をふるひて繪師の繪の具を盡し。作物司の木の色を樣々に割りすゑたるやうには非ざるべし。唯よみあげ打ちながむるに。げにと覺えてをかしくも聞ゆる姿あるべしと。

著書には古來風體抄あり。家集を長秋詠藻といふは。皇太后宮の御所を唐名にて長秋宮と稱するが故に。皇太后宮太夫の官の名に思ひよせたるなり。

和歌所の知行所など賜はりて。和歌專門の家を開き。是より子孫相つぎて門閥をなし。此道をもて朝廷に仕ふるは。俊成にはじまれり。

式子內親王

後白川天皇の皇女にて。平治元年加茂の齋院に立たせ給ひしかば。萱の齋院とも。大炊御門の齋院とも申し。また高倉の宮とも稱へ奉りしが。後御ぐしおろし給ひては。承如法と御法名を呼ばれ給へり。和歌にすぐれ給へりしは。代々の撰集に御詠のあまた入りたるを見て知るべし。

藤原良經（よしつね）

後京極攝政前太政大臣と百人一首に出でたるは是なり。祖父を法性寺忠通といひ。父を後法性寺兼實といふ。

後鳥羽天皇は其和歌に長じたるを以て。常に重んじ用ひ給ひしが。土御門天皇の御宇になりて。建永元年りの亭に行幸あらせ給はんとせし日。刺客のために殺されたり。傳說紛々として。何の故とも何人の所以なりとも遂に世に知られず。

謂はゆる新古今體作者の主たる人にて。家集を月清集といへるは。秋篠月清（あきしのの一つきせいしゅ）といふ變名を用ひしに因るなり。

鳴長明（からのちやうめい）

隱逸の歌人として知られたる長明は。始の名を菊太夫と稱す。京都加茂の社の禰宜長繼の子なり。幼くして孤兒となりしかば。父の職を繼ぐ能はずして止まんとす。

長明管絃をよくし和歌に妙なりしかば。後鳥羽上皇擧げて和歌所の寄人とし給へり。且りの父祖の職を繼ぐ能はざるを憐み。之を加茂の禰宜たらしめんとしたまひしかど。妨ぐる者ありて遂に達せず。

長明これより快々として樂しまず。遂に寄人を辭して剃髮し。名を蓮胤と改め大原山に入る。五十歳の時なりき。

長明かつて琵琶の愛器を藏し。其名を手習と附けたり。出家せし後。後鳥羽上皇御使をもて其器を尋ね給ひしに。長明撥に書きつけて奉りし。

かくしつゝ　峰のあらしの　音のみや
　　遂に我身を　はなれざるべき

拂ふべき　苔の袖にも　露しあれば
　　つもれる塵も　今はさながら

上皇にはじめて召されける時。

夜もすがら　ひとり深山の　槇の葉に
　　曇るも澄める　有明の月

とよめりしは殊に宜しとの御評ありき。之を思ひてか。寄人を辭せし時。

住みわびぬ　げにや深山の　槇の葉に
　　曇るといひし　月を見るべき

と書きて奉りしはあはれなりと。世に評しあへり。

順德天皇の建暦年中鎌倉に遊びしかば。將軍實朝りの名を慕ひて。營中に招く事しば〳〵なりき。程なく京都に歸りて浮世を厭ふ心いよ〳〵深く。小庵を日野山に作りて。琵琶と和歌とを友としつゝ。佛道に心を專にして月日を送れり。この小庵の自記を名づけて方丈記といふ。本文は作例に引くべければ此には載せず。

遺稿には瑩玉集。無名抄。發心集。文字鏁。四季物語。家集などあり。何れも世に知らる。

俊成の女

實は俊成の孫なりとの說もあり。八條院に仕へて三條と呼ばれし人。大納言通具の室となりたり。

父俊成より讓られて。播磨の越部莊を領せしが。地頭の妨多くして困難なるを訴へんとて。一首の歌を北條泰時に寄せて曰く。

君ひとり　跡なき麻の　數知らば
　　殘る蓬の　かずをこそわれ

是れ嘗て泰時が。

世の中に　麻はあとなく　なりにけり
　　心のまゝの　よもぎのみして

とよめりし歌あるを聞きて。さながら其言葉を利用せしなり。

かの歌一たび達するや。評定にも及ばず。二十一條の地頭の非法を制止せしといふ。女ながらも魂の雄々しかりしを思ふべし。

長明の無名抄に曰く。今の御所には俊成卿の女と聞ゆる人と。宮內卿と二人こそ。殊の外にかはりて侍れ。人の語り侍りしは。俊成卿の女は。晴の歌よまんとては。まづ日頃かけて。もろ〳〵の集どもを繰返しよく見て。思ふばかり見をはりぬれば。皆取り置きて。火幽かにともして。人遠く音なくして

宮内卿

右京太夫師光の娘にして。後鳥羽上皇に奉仕せる官女なりき。

増鏡に曰く。男も女も此御代（土御門天皇）にあたりて。よき歌よみ多く聞え侍りし中に。宮内卿の君といひしは。村上の帝の御後に。俊房の左の大臣と聞えし人の御末なれば。早うは貴人なれど。官淺くて。打ち續き四位ばかりにて失せにし人の子なり。まだいと若き齢にて。底ひもなく深き心ばへをのみよみしこそ。いと有難く侍りけれ。この千五百番の歌合の時。院の上のたまふやう。此度は皆世に許りたる古き道のものどもなり。宮内卿はまだしかるべけれども。けしうはあらずと見ゆめればなん。かまへて朕が面れこすばかりよき歌つかうまつれと。仰せらるゝに。面うち赤めて涙ぐみて候ひける氣色。限なきすきの程もあはれにぞ見えける。云々。此人年積るまで有らましかば。げに如何ばかり目に見えぬ鬼神をも動かしなましに。若くて失せにし。いと〳〵ほしくあたらしくなん。と。

又前の俊成の女の處に引きたる續きの無名抄に曰く。宮内卿は初めより草子

卷物とりこみて。切燈臺に火近くともしつゝ。かつ〳〵書きつけ〳〵。夜も晝も怠らずなん按じける。此人はあまりに歌を深く按じて。一度は死にはづれしたりき。父の禪門。何事も身のある上の事にこそあれ。かくしも病になるまでは。いかに按じ給ふぞと誡められけれど用ひず。終に命もなくてやみにしかば。うの積りにやありけん。寂蓮入道は殊に此事をいみじがりて。と。尋常の歌人ならざりけるを知る。今の世にも命にかふるほど執心の女性歌人。あはれ有りや無しや。

下野

日吉の社の禰宜允仲の娘にて。これも後鳥羽上皇の官女なり。一名を信濃とも呼ばれしといふ。

逸事は傳はらざれども。歌は其代に勝れたる人と見えて。新古今より新續古今まで十四代の勅撰に。一度も歌の漏れし事なく。數もあまた入りたりと。歌仙部類抄にはいへり。

源實朝

右大將頼朝の第二子にして。幼名を千幡といへり。建仁三年十二歳にして兄頼家の跡を繼ぎて征夷大將軍に任ぜられ。建保四年權中納言兼左近衛中將に。六年正月權大納言に。二月兼左近衛大將に。十月内大臣に。十二月右大臣に進み。承久元年正月三十七日。鎌倉鶴岡の社に於て甥公曉のために殺されたり。時に年二十八。

和歌を定家に學びて萬葉の古體を好み。一ふし高き調べをよみて流行の風を見下したるは。既にもいへり。とにかく近古中出色の名匠たりしなり。

藤原雅經

刑部卿頼經の子にして官は參議に至り。承久三年五十二歳にて薨ぜり。歌道にては飛鳥井家の祖と仰がる。新古今撰者の一人たりしは上に出でたり。兄宗長と共に又蹴鞠の名人なりしといふ。

慈鎮和尚

法性寺入道前關白太政大臣藤原忠通の子なり。剃髪して延暦寺の座主覺快法親王に師事す。始の名は道快なりしが。のち慈圓と改めたり。慈鎮は沒後追贈せられし諡號なりき。嘗て大和の吉水院に住みたるをもて。吉水和尚とも呼ばれたり。

順德天皇の建暦二年より後。天台の座主に任ぜられしこと四回。然れども每度辭して永く此職に居らざりき。

慈鎮に弟ありて奈良の一條院に門主たり。或年の八月十五夜に。寺男ども打ち集まり。いかに今夜は慈圓坊の歌よみ給ふならんと噂するを聞きて。大に感ずる所あり。翌日比叡山なる兄慈鎮のもとに書を贈つて曰く。今一山の貴首たる貴重の御身を以て。日夜歌道にのみ御心を寄せ給ふは。釋門の本義にも背かずや。昨夜下男どもの月につけて御噂申すを聞き。世上の風評も想像するに堪へたり。請ふ此後は歌道を放擲し給へかしと。慈鎮返書して其深情を謝し。一首の歌を添へて曰く。

皆人の　一つの癖は　あるぞとよ
われには許せ　敗島の道

と。門主これを讀みて再び言はず。

堀河天皇の嘉祿元年沒す。年七十一。家集を拾玉集といふ。

藤原家隆（いへたか）

壬生中納言光隆の第二子にて。官位は宮内卿從二位に至れり。

若年の頃。當時の歌人寂蓮法師の婿となりたる事ありしかば。寂蓮の紹介にて俊成の門に入り和歌を學ぶ。俊成或る時人に語つて曰く。家隆は歌仙と爲るべきものなり。我家に來る毎に。歌よむ心得をのみ尋ねて。他の故實難義等の事に及ばずと。感嘆して措かざりしが。果して和歌を以て名を天下に揚げ。家隆定家と並び稱せらるゝに至れり。

或る時京極良經。家隆に問ふに當時第一の歌人を以てす。家隆答へずして懷紙を落して退出せり。良經拾ひて見れば。

明けぼの又　秋のなかばも　過ぎぬべし
空ゆく月の　をしきのみかは

の歌あり。是れ中納言定家のよめるところ。定家また歌集を撰ぶ毎に。家隆の作を採り用ふる事おほし。互に推し重んぜられたる此くの如し。

新古今撰者の一人となりて。常に後鳥羽上皇に昵近し奉りしかば。上皇隱岐に遷され給ひし後も。題を賜はりて和歌を獻ぜしめ給ふ。上皇隱岐にての御製あり。

我こゝは　新島守よ　隱岐の海の
あらき波風　こゝろして吹け

是をや傳へ聞きたりけん。家隆都より。

寐覺して　聞かぬを聞きて　悲しきは
荒磯波の　あかつきの聲

とよみて奉りしには。上皇も御袖しぼらせ給ひしよし。增鏡にしるせり。

四條天皇の嘉禎二年。重病により剃髮し。名を佛性と改めて攝津の天王寺に移り住めり。かくて專ら佛道に歸依し。念佛を朝暮の勤としつゝよみける歌。

契りあれば　難波の里に　やどり來て
波の入日を　をがみつるかな

難波の海を　雲井になして　ながむれば
　遠くもあらず　彌陀の御國は
八十まで　あるかなきかの　玉の緒は
　亂さですくへ　救世の誓ひに
かくばかり　契りましまず　阿彌陀佛を
　知らず悲しき　年を經にけり

是れ翌年四月八日の事なりしが。九日の酉の刻に遂に沒せり。年八十。

家隆は生涯に歌れほくよみたる人にて。其數六萬首にも達せしといふ。家集を壬二集といへるは。壬生二位の家集といふ心なり。一名を玉吟集ともいへり。

子を隆祐といふ。侍從にて歌よみたり。

藤原定家

俊成の子にて。始の名を光季といひ。次に季光と改め。遂に定家と定めたり。諸官を經て。安貞元年正二位に。貞永元年權中納言に進みしが。四條天皇の

天福元年。剃髪して明靜と號す。時に年七十一。

定家歌道を以て。後鳥羽上皇に寵を蒙る事いと深く。其院宣を奉じて新古今を撰びし時も。初稿には四季戀雜の部いづれにも。古人の歌を以て卷頭に置きたりしを。上皇命じて定家家隆の歌にかへしめ給ひし事ありき。

後又新勅撰和歌集を撰びしは。後堀河上皇の院宣によれり。されども未だ奏覽に及ばずして。上皇崩御ありしかば。失望のあまりにや。りの草稿を燒き捨てしなど。みづから明月記にしるせり。

定家家にありて歌よまんとする時は。南面の障子を開きて遠く外を望み。衣を整へ正座して筆を執るを常とす。又かつて曰へり。歌よまんと思ふ時まづ白居易の。故鄉有母秋風淚。旅館無人暮雨魂。および。蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中。などの句を吟ずる時は。れのづから心深く調べ高き歌のよまるゝなりと。

嵯峨の小倉山に一の山莊を營み。常に遊び歌をよみて樂しめり。山莊は清涼寺の西二町ばかり愛宕路の北にありて。之を中の院と稱す。後に子の爲家を

中院大納言と稱せしは。老いて此山莊に住みしが故のみ。かの世にもてはやさるゝ百人一首を。小倉百首とも稱ふるは。此山莊の障子に。定家みづから色紙に書きて押したりしより起れる名なり。

其本邸は京極の西にありしかば。世に京極黄門と呼ばる。この庭に愛樹ありし事は。徒然草に。京極入道中納言は。猶ひとへ梅をなん軒近く植ゑられたりける。京極の屋の南向に。今も二本侍るなり。といへるにて知るべし。

四條天皇の仁治二年薨ず。年八十。著はせるもの。詠歌大概。雨中吟。未來記。顯註密勘。僻案集。毎月抄。源氏奥入あり。記錄の名を明月記といひ。家集を拾遺愚草および拾遺員外と名づく。拾遺は侍從の異名なれば。官の侍從なりし頃や名づけゝらし。

橘成季

古今著聞集の作者たる外には傳つたはらず。後深草天皇の頃の人なり。

藤原信實

法性寺隆信の子にて初の名は隆實。右京權太夫また中務大輔となる。歌文をよくし畫に妙なり。文永二年十二月十六日卒す。年八十九。文の遺稿には今物語あり。

辨内侍

信實の娘にて。後深草天皇の官女たり。父に受けて歌にすぐれ文にすぐれたり。辨内侍日記世に知らる。

藤原爲家

定家の子なり。藏人頭より參議を經て從三位權大納言民部卿に進む。後嵯峨上皇の院宣によりて續後撰集を撰びしかば。祖父俊成の千載集。父定家の新勅撰集と共に。此家の三代集と稱へて名譽とするところなりき。後又續古今集撰者の一人たりしは。前すでに述べたれば。再び言はでもありなん。

康元元年剃髪して融覺と名づく。これより中院禪門もしくは民部卿入道などゝ呼ばれたり。建治元年薨ず。年七十八。

阿佛尼

前但馬守平廣繁の娘にて。順德天皇の中宮安嘉門院に仕へ奉りしかば。初は

安嘉門院の衛門佐と呼ばれ。後には四條と呼ばれたり。藤原爲家の妻となりて、爲相を生み。後剃髪して阿佛尼と號す。世には北林禪尼とも稱したり。爲相に異腹の兄あり爲氏といふ。爲相の幼きを侮りて。その父より讓られたる播州越部莊を奪ひしかば。阿佛これが理非曲直の裁判を乞はんとて。遂にみづから鎌倉に下る。時は後宇多天皇の建治三年十月。りの旅の紀行を十六夜日記といふ。一讀せば慈母教訓の厚さ思ひ知られて。感泣に堪へざるものあらん。

阿佛の至誠や天に通じたりけん。訴は勝つ事を得て事全くをさまりしといへども。遂に鎌倉の旅中に沒せり。その假に住みたる地をば月影谷といひ。墓は英勝寺の境内にあり。

著述は十六夜日記の外。阿佛坊口傳。乳母の文。夜鶴抄など世に知らる。

藤原爲氏

爲家の長子なり。正二位權大納言に至り。弘安八年剃髪して名を覺阿といひしが。翌年六十五歳にて薨ぜり。和歌の一派を立て二條家の祖と仰がる。續拾遺和歌集の撰者たりき。

ある時阿佛尼のもとにゆきたりし時。明り障子といふ文字を隱して歌よめ。さなくは對面すまじと言はれしかば。

いにしへの　いぬきが飼ひし　雀の子
飛びあがりしや　うしといふらん

とよめりし當意即妙の才には。阿佛尼も感じ入りしとなん。

藤原爲相

爲家の二男。すなはち阿佛尼の生むところなり。兄爲氏と爭論の事ありて。母の鎌倉に下りし事は阿佛尼の傳中にいへり。爲相も後かの地に至りて藤谷に住みたる事ありき。和歌の名は兄に讓らず。これも一家をなして冷泉家の祖と仰がれたり。

金澤稱名寺の庭に一木の楓のありけるが。他よりも早く紅葉せしを見て。

いかにして　この一もとに　時雨れけん
山に先だつ　庭のもみぢ葉

とよみしかば。うれより此一木に限り。秋になりても紅葉せざるよし。言ひつたへたり。事は附會なるべけれど。うの歌の名高かりしは。以て知るべし。正二位權中納言に至り。嘉暦三年鎌倉に薨ず。年六十六。

第四十七章　散文の作例

江口の遊女　西行法師

過ぎぬる長月廿日あまりのころ。江口といふ所を過ぎ侍りしに。家は南北の川にさしはさみ。心は旅人の往來の舟をおもふ。遊女のありさまいとあはれにはかなきものかなと。見たてりし程に。冬を待ちねぬ村時雨の。さえわたり侍りしかば。けしかる賤が伏屋に立ちより。晴間まつまの宿をかり侍りしに。あるじの遊女。ゆるす氣色の見へ侍らざりしかば。何となく。

世の中を　いとふまでこそ　かたからめ
かりの宿りを　をしむ君かな

とよみてはんべりしかば。あるじの遊女うちわらひて。

世をいとふ　人とし聞けば　かりのやどに
心とむなと　われもふばかりぞ

と返して。いうぎ内に入れ侍りき。唯時雨のほどのまばしの宿とせんとこそ思ひ侍りしに。此歌のれもしろさに。一夜のふしどゝし侍りき。このあるじの遊女。今は四十あまりにもやなり侍るらん。みめことがら。さもあてにやさしく侍りき。夜もすがら何となき事どもかたりし中に。此遊女のいふやう。いとけなかりしより。かゝる遊女となり侍りて。年ごろ其ふるまひをし侍れども。いと本意なくおぼえて侍り。女は殊に罪のふかきと承るに。この振舞をさへし侍る事。げに前の世の宿執のほど思ひしられ侍りて。うたてしくこうおぼえ侍りしか。此二三年は。此心いと深くなり侍りしうへ。年もたけ侍りぬれば。ふつにそのわざをもし侍らぬなり。同じ野守の鏡なれども。夕は物のかなしくて。すゞろに涙にくらされて侍り。此かりそめの浮世には。いつまでかあらんずらんと。

あぢきなく覺ゆ。あかつきには心のすみて。別れをしたふ鳥の音など。ことにあはれに侍り。しかあれば夕には。今宵過ぎなばいかにもならんと思ひ。曉には此夜あけなば。さまをかへて思ひとまらんとのみ思ひ侍れども。年をへて思ひなれにし世の中とて。雪山の鳥の心地して。今までつれなくやみぬるかなしさとて。しやくりもあへず泣くめり。

此事聞くにあはれに有りがたく覺にて。墨染の袖しぼりかねて侍りき。夜明け侍りしかば。名殘は多く侍れども。再會をちぎりて別れ侍りぬ。さて歸る道すがら尊く覺にて。幾度か涙をも落しけん。今更心をうごかして。草木を見るにつけても。かきくらさるゝ心地し侍り。狂言綺語のたはぶれも。讃佛乘の因とは是かとよ。かりのやどりをも惜しむ君かなといふ。腰折を我よまざらましかば。此遊女のやどりをかさぐらまし。かゝらばなどてか。いみじき人にもあひ侍るべき。此君ゆゑに我もいさゝかの心を。須臾のほど發し侍りぬれば。無上菩提の種も。いさゝかなどかきざゝざるべきと。嬉しく侍り。

さて約束の日たづねまかるべきよし。思ひはんべりしほどに。上人の都より來て。うちまぎれて空しくなりぬる本意なさに。たよりの人をかたらひて。消息しはんべりしに。かく申しおくり侍りき。

かりうめの　世には思ひを　殘すなと
聞きし言のは　忘られもせず

と申しつかはして侍りしに。たよりにつけて其返事侍りき。いそぎ開いて侍りしかば。世にもをかしき手にて。

忘れずと　まづ聞くからに　袖ぬれて
我身もいとふ　夢の世の中

というて又奥に。さまをこそかへ侍りぬれ。おもかはあれども。心はつれなくてなんと書きて。又かく。

髮おろし　衣の色は　染めぬるに
なほつれなきは　心なりけり

と書いて侍りき。

見しに涙すゞろにもろくて。袂にうけかねて侍りけり。さもいみじかりける遊女にてゞ侍りける。さやうの遊び人なんどは。さもあらん人になじみ愛せらればやなんどこう思ふめるに。其心をもてはなれて。一すぢに後世にこゝろをかけゝん。有がたきには侍らずや。よもをろ〳〵の宿善にても侍らじ。世々にたくはへおきぬる戒行どもの。江口の水にうほされぬるにこそ。歌さへれもしろくゞ侍る。さても又宵には此夜すぎなばと思ひ。曉には明けなばと涙をながすと語り侍りし心の。つひにうちつゞきぬるにや。さまかへぬるは。其後もたづねまかりたく侍りしを。さまかへて後は。江口にも住まずとやらん聞きはんべりしかば。つひにむなしくやみ侍りき。

彼遊女の最後の有さま何とはんべるべきと。返ず〳〵床しく侍り。宵あかつきに心のすみけん。理りにゞ侍る。何と有る事やらん我らまでも。ゆふべは物がなしくて。荻の葉にうよめきわたる秋風あらし。かよふとすれば深山邊の。木の葉みだれて物思ふ。時雨にまがふ木の葉にも。袂

をぬらすは夕暮の空なり。長夜のあかつき。さびたる猿のこゑを聞き。胡雁のつらなれる音を聞きはんべるは。りの事となく心のすみて。すゞろに涙のこぼるゝずとよ。（撰集抄）

末葉のやどり　鴨長明

こゝに六十の露消えがたに及びて。更に末葉のやどりを結べることあり。いはゞ狩人の一夜の宿をつくり。老いたる蠶のまゆを營むがごとし。これを中ごろのすみかになずらふれば。また百分が一にだにも及ばず。とかくいふ程に。齡は年々にかたぶき。住家はをり〳〵にせばし。その家のありさま世の常にも似ず。廣さは僅に方丈。高さは七尺が内なり。所をれもひ定めざるが故に。地をしめて造らず。土居を組み。うちれほひを葺きて。つぎめごとに。かけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば。安く外に移さんがためなり。りの改め造る時。いくばくのわづらひかある。積むところわづかに二輛なり。車の力をむくゆる外は。更に他の用途いらず。

いま日野山の奥に。跡をかくして後。南に假の日がくしをさし出だして。竹の簀子を敷き。うの西に閼伽棚を作り。中には西の垣に添へて。阿彌陀の畫像を安置しまつりて。落日を請けて眉間のひかりとす。かの帳のとびらに。普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上に。ちひさき棚をかまへて。黑き皮籠三四合を置けり。すなはち和歌管絃往生要集ごときの抄物を入れたり。傍に箏琵琶おの〳〵一張をたつ。いはゆる折琴つぎ琵琶これなり。東にうへて。蕨のほゞろを敷き。つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて。こゝに文机を出だせり。枕の方に爐あり。これを柴折りくぶる便とす。庵の北に少地をしめ。あばらなる姫垣を圍ひて園とす。すなはちもろ〳〵の藥草をうゑたり。假の庵のありさまかくのごとし。

その處のさまをいはゞ。南に筧あり。岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ。爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげゝれど。西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。柴雲の如くにして西のかたに匂ふ。夏は時鳥をきく。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳に滿てり。空蟬の世をかなしむかと聞ゆ。冬は雪を憐む。つもりきゆるさま。罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく。讀經まめならざる時は。みづから休み。みづから怠るに妨ぐる人もなく。また耻づべき友もなし。殊更に無言をせざれども。境界なければ何につけてか破らん。もし跡の白波に身をよする朝には。岡の屋に行きかふ船をながめて。滿沙彌が風情をぬすみ。もし桂の風。葉をならす夕には。潯陽の江を想ひやりて。源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば。しば〳〵松のひゞきに秋風の樂をたぐへ。水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども。人の耳を悅ばしめんとにもあらず。ひとり調べ獨り詠じて。みづから心を養ふばかりなり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはち山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來りてあひとぶらふ。もしつれ〳〵なる時は。これを友とし

て遊びありく。かれは十六歳。われは六十。その齡ことの外なれど。心を慰むることはこれ同じ。

或はつばなを拔き。岩梨を採る。またぬかごを盛り芹つむ。或はすりわの田ゐに至りて。落穗を拾ひて穗組をつくる。もし日うらゝかなれば。嶺に攀ぢのぼりて。遙に故鄕の空を望み。木幡山。伏見の里。鳥羽。羽束師を見る。勝地は主なければ。心を慰むるさはりなし。あゆみ煩ひなく。志遠くいたる時は。これより峯つゞき炭山を越え。笠取を過ぎて。岩間にまうで。石山をゝがむ。もしはまた粟津の原を分けて。蟬丸の翁が跡をとぶらひ。田上川をわたりて。猿丸大夫が墓をたづね。歸るさには。をりにつけつゝ櫻をかり。紅葉もとめ。蕨を折り。木の實を拾ひて。且は佛に奉り。且は家づとにす。もし夜靜なれば。窓の月に古人を忍び。猿の聲に袖をうるほす。草村の螢は。遠く眞木島の篝火にまがひ。曉の雨は。れのづから木の葉吹く風に似たり。山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても。父か母かと疑ひ。峯のかせぎの近く馴れたるにつけても。世に遠

ざかる程を知る。

或は埋火をかきおこして。老の寐覺の友とす。れうろしき山ならねど。梟の聲をあはれむにつけても。山中の景氣。折につけて盡くる事なし。いはんや深く思ひ。深く知れらん人のためには。これにしも限るべからず。

大かた此所に住み初めし時は。あからさまと思ひしかど。今までに五年を經たり。假の庵もやゝ古屋となりて。軒には朽葉ふかく。土居に苔むせり。

おのづから事の便に都を聞けば。この山に籠り居て後。やんごとなき人の。かくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてうの數ならぬたぐひ。盡してこれを知るべからず。たび〳〵の炎上にほろびたる家。また幾ばくぞ。たゞ假の庵のみ。のどけくしておりれなし。ほど狹しといへども。夜臥す床あり。晝居る座あり。一身をやどすに不足なし。寄居はちひさき貝を　このむ。これよく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなは

ち人をれうるゝが故なり。我またかくのごとし。身を知り世を知れらば。願はずまじらはず。たゞ靜なるを望とし。憂なきを樂しみとす。すべて世の人の。住家を作るならひ。かならずしも身のためにはせず。或は妻子眷屬のために作り。或は親昵朋友の爲めに作る。或は主君師匠。および財寶馬牛のためにさへ之をつくる。我いま身のためにむすべり。人のために作らず。ゆゑいかんとなれば。今の世のならひ。この身のありさま。ともなふべき人もなく。たのむべき奴もなし。たとひ廣く作れりとも。誰をやどし誰をかすゑん。

れ人の友たる者は。富めるを尊み懇なるを先とす。かならずしも情あると。直なるとをば愛せず。たゞ糸竹花月を友とせんにはしかず。人の奴たるものは。賞罰の甚しきを顧み。恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども。やすく閑なるをば願はず。たゞ我身を奴とするには如かず。もしなすべきことあれば。すなはちれのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど。人を從へ人を願みるよりはやすし。

もしありくべきことあれば。みづから歩む。苦しといへども。馬鞍牛車と心を惱ますにはしかず。今一身を分ちて。二つの用をなす。手の奴。足の乘物。よくわが心にかなへり。心また身のくるしみを知らば。苦しむ時はやすめつ。まめなる時はつかふ。つかふとても度々過さず。ものうしとても心を動かすことなし。いかに況んや。常にありき常に動くは。これ養生なるべし。何ぞいたづらに休み居らん。人を惱ますはまた罪業なり。いかゞ他の力をかるべき。

衣食のたぐひまた同じ。藤の衣。麻のふすま。得るに隨ひて肌をかくし。野邊の茅花峰の木の實。僅に命をつぐばかりなり。人にまじはらざれば。姿を耻づる悔もなし。糧乏しければ。れろうかなれども猶味を甘くす。すべてかやうのこと。樂しく富める人に對していふにはあらず。たゞわが身一つにとりて。昔と今とをたくらぶるばかりなり。大かた世を遁れ身を捨てしより。恨もなく恐もなし。命は天運にまかせて。惜しまず厭はず。身をば浮雲になずらへて。頼まずまだしとせず。一期のたのしみ

は。うたゝねの枕の上にきはまり。生涯の望は。をり〳〵の美景にのこれり。

うれ三界は。たゞ心一つなり。心もし安からずは。牛馬七珍もよしなく。宮殿楼閣も望なし。今さびしき住居。一間の庵。みづからこれを愛す。おのづから都に出でゝは。乞食となれることを耻づといへども。かへりてこゝに居る時は。他の俗塵に着することをあはれぶ。もし人このいへることを疑はゞ。魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざればうの心を知らず。鳥は林を願ふ。鳥にあらざればうの心をしらず。閑居の氣味もまたかくの如し。住まずして誰かさとらん。（方丈記）

軍評定

作者知らず

新院は齋院の御所より北殿へ遷らせ給ふ。左府は車にて參り給ふ。白河殿より北。河原より東。春日の末にありければ。北殿とゞ申しける。南の大炊御門おもてに。東おもてに門二つあり。東の門をば平馬助忠正承りて。父子五人。ならびに多田藏人大夫頼憲。都合二百餘騎にて固めたり。

西の門をば六條判官爲義承りて。父子六人して固めたり。其勢百騎許には過ぎざりけり。是こう猛勢なるべきか。嫡子義朝に附きて。多分は内裏へ參りけり。

爰に鎮西の八郎爲朝は。我は親にも連ならじ。兄にも具すまじ。高名不覺も紛れぬ樣に只一人。如何にもこはからん方へ差し向け給へ。たとひ千騎もあれ萬騎もあれ。一方は射拂はんずるなりとゞ申しける。よつて西河原表の門をゞ固めける。

北の春日表門をば。左衛門大夫家弘承りて。子供具して固めたり。其勢百五十騎とゞ聞えし。

そも〳〵爲朝一人として。殊更大事の門を固めたる事。武勇天下に許されし故なり。件の男器量人に越に。心飽くまで剛にして。大力の强弓。矢つぎばやの手きゝなり。弓手のかひな。馬手に四寸伸びて。矢束を引く事世に越えたり。幼少より不敵にして。兄にも所をおかず。傍若無人

なりしかば。身に添へて都に置きなば。惡しかりなんとて。父ふけうして。十三の歳より鎮西の方へ追ひ下すに。豐後の國に居住し。尾張の權守家遠をめのとゝし。肥後の國阿蘇の平四郎忠景が子に。三郎忠國が婿になつて。君よりも賜はらぬ。九國の總追捕使と號して。筑紫を從へんとしければ。菊地原田を始として。所々に城を構へてたてこもれば。其義ならば。いで落して見せんとて。いまだ勢もつかざるに。忠國ばかりを案内者として。十三の歳の三月の末より。十五の歳の十月まで。大事の軍をする事二十餘度。城を落す事數十箇所なり。城を攻むる謀。敵を討つ手だて。人に勝れて。三年が内に九國を皆攻め落して。自ら總追捕使に押しなつて。惡行多かりけるにや。香椎の宮の神人等。都に上り訴へ申す間。いにし久壽元年十一月廿六日。德大寺中納言公能卿を上卿として。外記に仰せて宣旨を下さる。源の爲朝久しく宰府に住して。朝憲を忽諸し。ことゝく綸言にうむき。兇惡しきりに聞ゆ。狼藉もつともなり。早く其身をいましめまねらすべし。よつて宣旨執達くだんの如し。

然れども爲朝猶參洛せざりければ。同じき二年四月三日。父爲義を解官せられて。前の檢非違使になされにけり。爲朝是を聞きて親の科に當り給ふらんこうあさましけれ。其義ならば。我こそ如何なる罪科にも行はれんずれとて。急ぎ上りければ。國人共も上洛すべき由申しければ。大勢にて罷り上らん事。上聞穩便ならずとて。かたの如くに附き從ふ兵ばかり召具しけり。乳母子の矢先ばらひ須藤九郎家季。其兄透間數への惡七別當。手取の與次。同じき與三郎。三町礫の紀平次太夫。大矢の新三郎。越矢の源太。松浦の二郎。左中次。吉田の兵衛。打手の紀八。高間の三郎。同じき四郎を始として。廿八騎ず具したりける。依つて去年より在京したりしを。父ふけうを赦して。今度の御大事に召具しけるなり。爲朝は七尺ばかりなる男の。目かど二つきれたるが。かちんに色々の絲を以て。獅子丸を縫うたる直垂に。八龍といふ鎧を似せて。白き唐綾を以て威したる大荒目の鎧。同じき獅子の金物打つたるを着るまゝに。三尺五寸の太刀に熊皮の尻鞘入。五人張の弓。長さ七尺五寸にてつく打つ

たるに。三十六差したる黑羽の矢負ひ。兜をば郎等に持たせて歩み出でたる體。樊噲も斯くやと覺えてゆゝしかりき。謀は張良にも劣らず。されば敵の陣を破る事。吳子孫子が難しとする處を得。弓は養由をも恥ぢざれば。天を翔る鳥。地を走る獸の。恐れずといふ事なし。

上皇を始め參らせてあらゆる人々。音に聞ゆる爲朝見んとてこゞり給ふ。左府即ち合戰の趣はからひ申せと宣ひければ。畏つて。爲朝久しく鎭西に居住仕つて。九國の者共從へ候ふについて。大小の合戰數を知らず。中にも折角の合戰二十餘箇度なり。或は敵に圍まれて强陣を破り。或は攻めて敵を亡ぼすにも。皆利を得る事夜討にしく事侍らず。然れば只今高松殿に押し寄せ。三方に火を懸け。一方にて支へ候はんに。火を遁れん者は矢を免るべからず。矢を恐れん者は火を遁るべからず。主上の御方心にくゝも候はず。但し兄にて候ふ義朝などこうかけいでんずらめ。うれも眞中差して射通し候ひなん。まして清盛などがへろ〳〵矢。何程の事か候ふべき。鎧の袖にて拂ひ蹴散して捨てなん。行幸他所へならば。

御免されを蒙つて。御供の者。少々射んずる程ならば。定めて駕輿丁も御輿を捨てゝ逃げ去り候はんずらん。其時爲朝參り向ひ。行幸を此御所へ成し奉り。君を御位に即け參らせん事。掌を返す如くに候ふべし。主上を迎へ參らせん事。爲朝二矢放さんずるばかりにて。いまだ夜の明けざらんさきに。勝負を決せん事。何の疑か候ふべきと。憚る所もなく。申したりければ。左府。爲朝が申す條以ての外の荒儀なり。年の若きが致す所か。夜討などいふ事。汝等が同士軍。十騎二十騎の私事なり。さすが主上上皇の御國爭に。源平數を盡して。兩方にあつて勝負を決せんに。無下に然るべからず。其上南都の衆徒を召さるゝ事あり。興福寺の信實玄實等。吉野十津河の指矢三町。遠矢八町といふ者共を召し具して。千餘騎にて參るが。今夜は宇治に着き。富家殿の見參に入つて。曉これへ參るべし。彼等を待ちとゝのへて。合戰をば致すべし。又明日院司の公卿殿上人を催さんに。參らざる者どもをば死罪に行うて。首を刎ぬる事兩三人に及ばゝ。殘はなどか參らざるべき。と仰せられければ。爲朝

上には承伏申して。御前を罷り立つてつぶやきけるは。和漢の先蹤朝廷の禮節には似も似ぬ事なれば。合戰の道をば。武士にこそ任せらるべきに。道にもあらぬ御はからひ如何あらん。義朝は武略の奥義を極めたる者なれば。定めて今夜寄せんとぞ仕り候ふらん。明日までも延びばこそ。吉野法師も奈良大衆も入るべけれ。只今押し寄せて。風上に火を懸けたらんには。戰ふともいかでか利あらんや。敵勝つに乘る程ならば。誰か一人安穩なるべき。口惜しき事かなとぞ申しける。（保元物語）

待賢門の軍

作者しらず

さる程に六波羅の皇居には。公卿詮議あつて清盛を召されけり。紺の直垂に黑絲威の腹卷に。左右の小手を差して。折烏帽子引き立て〻大床に畏る。

頭の中將實國を以て仰せ下されけるは。王事もろきことなければ。逆臣ほろびん事うたがひなし。但したま〳〵新造の內裏なり。もし回祿あらば。朝家の御大事たるべし。官軍いつはりて引き退かば。凶徒さだめて

進み出でんか。然らば官軍を入れかへて。內裏を守護せさせ。火災なきやうに思慮あるべしと。仰せ下されければ。清盛畏つて。朝敵たる上は。逆徒の誅戮は掌の內に候ふ間。時刻を廻らすべからず。然れば定めて狼藉出來せんか。火失なからん條こそ難義の勅定にて候へ。さりながら范蠡が吳國を覆し。張良が項羽を亡ぼせしも。皆是れ智謀の致す處なれば。涯分武畧を廻らして。禁闕無爲なる樣に。成敗仕るべしと。奏して出でられけり。

主上御座あれば。皇居の御固めに清盛をば留めらる。大內へ向ふ人々には。大將軍は左衛門佐重盛。三河守頼盛。淡路守教盛。侍には筑後守家貞。子息左衛門尉貞能。主馬判官盛國。子息右衛門尉盛俊。與三衛門尉景安。新藤左衛門家泰。難波次郎經房。妹尾太郎兼安。伊藤武者景綱。館太郎貞泰。同じき十郎貞景を始めとして。都合其勢三千餘騎。六波羅打ち出でゝ。鴨河を馳せ渡し。西の河原に控へたり。

左衛門佐重盛は生年廿三。今日の軍の大將なれば。赤地の錦の直垂に。

櫨匂の鎧。蝶の裾金物打つたるに。龍頭の兜の緒をしめて。小烏といふ太刀を佩き。切符の矢負ひ。重藤の弓持ちて。黄月毛なる馬に。柳櫻摺りたる貝鞍置かせて乘り給へり。

重盛宣ひけるは。年號は平治なり。花洛は平安なり。我等は平氏なれば。三事相應せり。敵を平らげん事何の疑かあるべき。誰か爰に樊噲張良が勇をなさざらんとて。三千餘騎を三手に分つて。近衛中の御門。大炊の御門。大宮おもてへ打ち出でゝ。陽明待賢郁芳門へ押し寄せたり。大内には三方の門をさし固め。表をは開かれたり。昭明建禮の脇の小門をも共に開きて。大庭には馬ども多く引き立てたり。梅壺桐壺雛が壺。紫宸殿の前後。東光殿の脇の壺まで。兵ひしと並み居たり。皆源氏の勢なれば。白旗二十餘流れ打ち立てたり。

大宮おもてには。平家の赤旗三十餘流れさし上げて。勇み進める三千餘騎。一度に鬨をどつと作りければ。大内も響きわたりて夥し。鬨の聲に驚きて。只今までゆゝしく見えられつる信頼卿。顔色變つて草葉の如く

にて。南階を下られけるが。膝ふるうて下りかねたり。人なみ〳〵に馬に乘らんと。引き寄せさせたれども。ふとりせめたる大の男の。大鎧は着たり。馬は大きなり。乘り煩ふ上。主の心にも似ず。はやりきつたる逸物なれば。つと出でん〳〵としけるを。舍人七八人寄つて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒も。かくやと覺ゆるばかりにて。乘りかね給ふ所を。侍二人つと寄つて。疾く召し候へとて押し上げたり。餘にや押したりけん。弓手の方へ乘りこして。伏樣にどうと落つ。急ぎ引き起して見れば。顔に砂ひしと附き。鼻血流れて見苦しかりけり。

義朝此體を見て。日頃は大將とて恐れ給ひけるが。はたと睨みて。あの信頼といふ不覺人は臆したりなとて。日華門を打ち出でゝ郁芳門へ向はれければ。信頼も鼻血押し拭ひ。兎角して馬に搔き乘せられ。待賢門へ向はれけるが。物の用にあふべしとも見えざりけり。

左衞門佐重盛。五百餘騎をば大宮おもてに殘し置き。五百餘騎にて押し

寄せて。呼ばゝり給ひけるは。此門の大將軍は信頼卿と見るは併目か。かく申すは桓武天皇の苗裔。太宰大貳清盛嫡子左衛門佐重盛。生年廿三と名乘り懸けゝれば。信頼返事にも及ばず。うれ防げ侍共とて引き退く。大將の引き給ふ間。防ぐ侍一人もなし。我先にと逃げければ。重盛彌勇みて。大庭の椋の木の下まで攻め附けたり。義朝是を見て。惡源太はなきか。信頼といふ大臆病人が。待賢門を早破られつるぞや。あの敵追ひ出だせと宣ひければ。承り候ふとてかけられけり。

續く兵には。鎌田兵衛。後藤兵衛。佐々木源三。波多野次郎。三浦荒次郎。須藤刑部。長井の齋藤別當。岡部六彌太。猪俣小平六。熊谷次郎。平山武者所。金子十郎。足立右馬允。上總介八郎。關次郎。片桐小八郎大夫。已上十七騎。轡を並べて馳せ向ふ。大音聲を揚げて。此手の大將は誰人ぞ。名乘れ聞かん。かく申すは清和天皇九代の後胤。佐馬頭義朝の嫡子。鎌倉の惡源太義平と申す者なり。生年十五歳。武藏大藏の軍の大將として。伯父帶刀先生義賢を討ちしよりこのかた。度々の合戰に。

一度も不覺の名をとらず。年積りて十九歳。見參せんとて。五百騎の眞中へ割つて入り。西より東へ追ひまくり。北より南へ追ひ廻はし。縱横横十文字に。敵を蹴散して。半武者どもに目なかけそ。大將軍を組んでうて。櫨匂の鎧に蝶の裾金物打つて。黃月毛の馬に乘りたるこう重盛よ。押し並べて組んで落ち。手捕にせよと下知すれば。大將をくませじと。防ぐ平家の侍ども。與三左衛門。新藤左衛門を始めとして。百騎許りが中にぞ隔たりける。

惡源太を始として。十七騎の兵ども。大將軍に目をかけて。大庭の椋の木を中に立てゝ。左近の櫻右近の橘を七八度まで追ひ廻して。組まん組まんとぞ揉んだりける。十七騎にかけたてられて。五百餘騎叶はじとや思ひけん。大宮面へ颯と引く。

大將左衛門は弓杖ついて。馬の息をつかせ給ふところに。筑後守つと參りて。曩祖平將軍。二度生れかはり給へる君かなと。向樣に譽めたてまつれば。今一度駈けて家貞に見せんとや思はれけん。前の五百餘騎をば

留め置き。新手五百餘騎を相具して。また大庭の椋の木まで攻め寄せたり。

又惡源太かけ向ひ。見廻していひけるは。只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こう洩らすとも。今度に於ては餘すまじ。押し並べて組んで捕れ。兵共と下知すれば。勇みに勇みたる十七騎。我先にと進みければ。今度は難波次郎同じき三郎。妹尾太郎。伊藤武者を始として。百餘騎が中に隔たるに事ともせず。

惡源太弓をば小脇にかい挾み。鐙踏ん張りつゝたちあがり。左右の手を擧げ。幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。よれや組まんといふまゝに。先の如く大庭の椋の木の下を追ひまはして。五六度までこう揉うだりけれ。

重盛組みぬべうもなくや思はれけん。又大宮おもてへ引いて出で。惡源太二度まで敵を追ひまくり。弓杖ついて馬に息をつかせけるに。義朝是を見て。須藤瀧口を以て汝が不覺に防げばこう。敵度々に駈け入るらめ。

あれ速に追ひ出だせと。いひ遣されければ。俊綱馳せて此由をいふに。承り候。進めや者共とて。色も替はらぬ十七騎。大宮おもてにかけ出でゝ。敵五百餘騎が中へ。面も振らず割つて入り。引き立てたる勢なれば。馬の足を立てかねて。大宮を下りに二條を東へ引きければ。我子ながらも義平は。能くかけたるものかな。あゝかけたりとぞ譽められける。（平治物語）

七騎落

土肥の次郎は。出富の小けんげうと云ふあまが小舟を借りて。眞鶴が崎といふ所より。急ぎ舟を出ださんとしけるに。子息の彌太郎申しけるは。萬壽冠者參るべき由承る。相待ちて召具せばやといふ。此彌太郎と云ふは伊藤入道には舅なり。萬壽冠者とは。彌太郎に子なくして妹が子を養子にしたれば。土肥にも伊藤にも孫なりけるを。母方の祖父なれば。伊藤の入道にあづけ置く。娘にも舅にも養子なれば。入道ふびんにしてはごくみけり。

作者しらず

留め置き。新手五百餘騎を相具して。また大庭の椋の木まで攻め寄せたり。

又惡源太かけ向ひ。見廻していひけるは。只今向ひたるは皆新手の兵なり。但し大將は元の大將重盛ぞ。以前こう洩らすとも。今度に於ては餘すまじ。押し並べて組んで捕れ。兵共と下知すれば。勇みに勇みたる十七騎。我先にと進みければ。今度は難波次郎同じき三郎。妹尾太郎。伊藤武者を始として。百餘騎が中に隔たるに事ともせず。

惡源太弓をば小脇にかい挾み。鐙踏ん張りつゝたちあがり。左右の手を擧げ。幸に義平源氏の嫡々なり。御邊も平家の嫡々なり。敵には誰か嫌はん。よれや組まんといふまゝに。先の如く大庭の椋の木の下を追ひまはして。五六度までこう揉うだりけれ。

重盛組みぬべうもなくや思はれけん。又大宮おもてへ引いて出で。惡源太二度まで敵を追ひまくり。弓杖ついて馬に息をつかせけるに。義朝是を見て。須藤瀧口を以て汝が不覺に防げばこう。敵度々に駈け入るらめ。

あれ速に追ひ出だせと。いひ遣されければ。俊綱馳せて此由をいふに。承り候。進めや者共とて。色も替はらぬ十七騎。大宮おもてにかけ出でゝ。敵五百餘騎が中へ。面も振らず割つて入り。引き立てたる勢なれば。馬の足を立てかねて。大宮を下りに二條を東へ引きければ。我子ながらも義平は。能くかけたるものかな。あゝかけたりとぞ譽められける。（平治物語）

七騎落

土肥の次郎は。出富の小けんげうと云ふあまが小舟を借りて。眞鶴が崎といふ所より。急ぎ舟を出ださんとしけるに。子息の彌太郎申しけるは。萬壽冠者參るべき由承る。相待ちて召具せばやといふ。此彌太郎と云ふは伊藤入道には舅なり。萬壽冠者とは。彌太郎に子なくして妹が子を養子にしたれば。土肥にも伊藤にも孫なりけるを。母方の祖父なれば。伊藤の入道にあづけ置く。娘にも舅にも養子なれば。入道ふびんにしてはごくみけり。

作者しらず

彌太郎が萬壽冠者を待たんといひけるを。父土肥の次郎が聞き咎めて大に不審せり。此間杉山に隱れ忍びて。七騎の外は人之を知らず。萬壽と云ふは。實平にも孫なれども。敵人伊藤がもとにあり。いかでか存知すべき。御供仕らんと申しける條。存じの外なり。あはれ彌太郎は事を萬壽冠者によせて。一定舅の入道待ちつけて。重代の主君を失ひ奉り。大恩の親を亡ぼさんと謀るにこそ。奇怪のやつなり。其首打ち斬り給へ岡崎殿と云ひければ。岡崎はいかなる勇なりとも。主や父に思ひかふる事あるまじ。しるべきやうこそ有りつらめ。但しかやうの身として片時も逗留其詮無し。はや〳〵急ぎ舟を出だせとて。四五町許漕ぎ出だして。浦の方を顧みれば。萬壽冠者を始として。伊藤入道五十餘騎の勢にて馳せ來る。あれ〳〵とぞ呼はりける。

後には大場の三郎一千餘騎ばかりにて續きたり。今すこしれうかりせば危かりける人々なり。漕げや急げとて。安房の國洲の崎を心ざして落ち行きける程に。沖中にして俄に風起り浪立ちて。いづことも知れず暗き

やみに。渚に舟をぞ吹きつけたる。人々舟にゆられて醉ひけり。

佐殿こゝは何處やらんと問ひ給へば。土肥見侍らんとて舟ばたに立ち。弓杖つき見廻せば。相模の國早川尻に侍り。しかも大場杉山の歸り足に。三千餘騎渚に幕引きて。七箇所に篝焚き。酒盛しける敵の陣に吹きつけらる。敵は見もあはらん。いかゞ有るべきと思ひ申し。佐殿杉山にて亡ぶべきものが。大菩薩の御加護によりてのがれぬ。しかるを今又敵陣にのゞめり。遂に見捨て給ふべきにやと。祈念申されけり。

實平は此邊に家人ならぬ者なし。酒肴尋ねまゐらせんとて。舟より飛びれり。片手矢はげて走りめぐり。我君此浦に着き給へり。實平に心ざしあらんものは酒肴まゐらすべしと。のゝしりいひければ。或は瓶子口つゝみ。或は桶に入れて。我も〳〵と舟に酒肴を運びたり。舟の中暗しといへども。敵の大場が篝火の光にて。佐殿酒を飲み給へり。誠に八幡大菩薩の御はからひと覺えたり。飢をやすめて。其後風やみ浪靜にて舟を出だして。安房の國洲の崎へこゝ漕ぎ渡り給ひけれ。

三浦の輩は軍將を尋ね奉らんとて。舟を海上にうかめて。安房上總あやしき浦々漕ぎめぐりけるに。佐殿の舟も三浦が舟も互にあやしく思ひて。沖中にて間近く漕ぎ合ひたる。若し又敵にもやと思ひてければ。かれもこれも矢たばねとき。弓の弦しめして用心せり。佐殿をば舟底にかくし。上に柴を積みて。岡崎ばかりさしあらはれて乘つたり。

三浦舟を漕ぎ近づけて。岡崎と見てければ。いかにやいかに。いづら佐殿はと問へば。誰も君を尋ね奉る。三浦にもやと思ひ奉るに。さてはいづくにおはしますらんといへば。三浦涙を流しつゝ。あな心うや。君の御行方のおぼつかなくてこそ。老いたる父をもふり捨てゝ。敵に後を見せて尋ねまゐらするに。かひなき事の悲しさよ。兼ねてかくとだに知りたらば。衣笠の城に引き籠り。大介と一所にて討死すべかりける物をとて。おの〳〵袖をぞしぼりける。

佐殿は舟底にて此事を聞き給ひ。いとほしや。世になき我をあれ程に思ふらん事のうれしさよ。心づくしに遲く出でゝ恨みられじと思召しけれ

ば。舟底よりはひ出でゝ。頼朝こゝにありと仰せければ。大將軍これに御わたりありけりや。大介宣ひつる事露違はずとて。三郎手を合せて悅びけり。

さても岡崎は。石橋の合戰に與一が討たれし事を語つて泣き。三浦は小坪きぬがさの軍の事。大介が申せし事。老いたる父を捨て置く事ども語つて泣く。一人は若きを先立てゝ袖をぬらし。一人は老いたるを見捨てゝ袂をぞぼる。恩愛慈悲の情とり〳〵なり。

和田の小太郎申しけるは。殿ばら今は歎きて其詮なし。親も子も死ぬる道は限りあり。なかんづく軍にあはん者は必ず死すべしと。かねて存ずる所なり。初めて歎くに及ばず。語ればいよ〳〵あはれをます。君かくておはしませば。今は誠に一しほ思ひ入りて。平家を亡ぼし本意を遂げて。君の御代になしまゐらせ。莊園を賜はり國を知行せんことを評定し給ふべし。食を願はゞ器物と云ふ下拙のたとへ有り。君もとく〳〵國々莊々を分け賜はり候ふべし。中にも義盛には。日本國の侍の別當を賜は

り候へ。上總守忠清が平家より八箇國の侍の奉行を賜はつて。もてなしかしづかれて氣色せしが。あまりに羨ましかりしかば。兼ねて申し入るゝなり。他人のけいばう有るべからずとぞ申しける。

佐殿は世にあらば左右にや及ぶべき。されどもはやしとて笑ひ給ひけり。

（源平盛衰記）

屋島合戰

作者しらず

大臣殿船中にてこれを見給ひて。能登殿へ仰せられけるは。源氏の軍將九郎冠者を。度々目にかけてうちはづしぬる事。返す〴〵遺恨なり。最前七騎にて寄せたりしには。殘黨に恐れて討ちとゞめず。海上にはせ入る時は。盛繼熊手に懸けはづしぬ。鍬形の兜に黃金作の太刀いちじるき裝束なり。舟より上つていくさし給へ。相構へて九郎冠者を目にかけ給へとのたまふ。

能登守は返事に。其條は存ずる所に候とて。飛彈の三郎左衛門の尉景經。同じき四郎兵衛景俊。越中の二郎兵衛盛繼。上總の五郎兵衛忠光。同じき七郎兵衛景清。矢野右馬允家村。同じき七郎高村。以下くつきやうの輩三十餘人。船を漕ぎよせ陸に上り。芝築地を前にあて後にあて。進退まねきたり。

判官日既に暮に及び。夜陰のいくさは憚あり。只今の敵は名ある者共とこそ覺えたり。連なる者共ひともみもまんとて打立ち給へば。土肥の二郎實平。大將軍度々の合戰輕々しく候。若者共にあづけ給へとて。判官をば本陣にとゞめおき。實平先陣に進みければ。子息彌太郎遠平。畠山の莊司二郎重忠。和田の小太郎義盛。熊谷の二郎直實。平山武者所季重。佐々木の四郎高綱。金子の十郎家忠。澁谷の莊司重國。子息右馬允重助。渡邊源五右馬允昵。伊勢の三郎義盛。鎌田の藤二光政。佐藤三郎兵衛繼信。弟に四郎兵衛忠信。片岡八郎爲春を初めとして。一人當千の者共五十餘騎。くつばみを並べてかけいづ。

平家はかちだちにて芝築地より打ち出でゝ。ひきつめ〳〵馬の上を射る。源氏は馬上よりさしあて〳〵おとし矢に射る。よせつかへしつ追うつ追

はれつ。入れかへ〳〵射あひたり。流るゝ血はいさごを染め。上る塵は煙の如し。源氏手おへば陣にかきいれ。平家討たるれば舟にはこびのす。こゝにして常陸の國の住人鹿島の六郎宗綱。鎌田の藤二光政。行方の六郎を初めとして。十餘人はうたれにけり。

能登守は心も剛に力もつよく精兵の手きゝなり。源氏がかけまはし〳〵て。ちとやすらふ所を見おふせて。さしつめ〳〵射ける矢に。武藏國の住人河越三郎宗頼。目の前に射られて引きしりぞく。次に河村三郎能高。内胄射られぬちにけり。次に太田の四郎重綱。小腕射られ引きしりぞく。次に片岡の兵衛經春。胸板射られて引き退く。

次に判官の乳母子。奥州の佐藤三郎兵衛繼信は。黑革縅の鎧を着たりけるが。首の骨を射貫かれ。眞逆樣に落ちたりけるを。能登守のわらはに菊王丸といふ者あり。もとは通盛の下人なりけるが。越前の三位討たれて後。其弟なればとて此人につきたりけるが。萠黃糸縅の腹卷に。左右の小手さして三枚兜ぬくびに着なし。太刀を拔いて飛んでかゝり。繼信が首を取らんとする。四郎兵衛忠信立ちとゞまり。引きかためて放つ矢に。菊王丸が腹卷の引合つゝ射ぬかれて。一足もひかずうつぶし倒る。忠信が郎等に八郎爲定。小長刀をもつてひらいて。わらはが首をとらんとかゝる。能登守わらはが首とられじと。太刀を打ちふりつゝより。童が手を取り引きたてゝ。にいでゝを出だして船に投げ入る。しばしは生くべくやありけんに。あまり強く投げられて。後一言もせず死にゝけり。忠信は此間に兄の繼信を肩に引きかけ。泣く〳〵陣の中へ負うて入れたり。判官ちかく居より給ひ。いかに繼信よ〳〵。義經こゝにあり。一所にてこそと契りしに。先だつる事のかなしさよ。いかにも後生をば吊ふべし。冥途の旅心安く思ふべし。さても何事をか思ふ。いひおけかしと宣へども。たゞ涙を流すばかりにて。是非の返事はなし。判官かさねて。汝が心があればこそ涙をば流すらめ。猛き兵の矢ひとつにあたつて。生きながら物いはざる事やはある。さほどのれくれたる者とは存ぜざるものを。今一度最期の言葉きかせよと宣へば。繼信息ふき出だし。よに苦

しげにて息の下に。弓矢とる身のならひなり。敵の矢にあたつて主君の名にかゝはるは。かねて存ずる所なれば。更に恨にあらず。たゞ思ふ事とては。老いたる母もすてれき。親しき者共にも別れて。遙かに奥州より附き奉りし心ざしは。平家を討ち亡ぼして。日本國を奉行し給はんを見奉らんとこそ存ぜしに。先だち奉るばかりこそ。心にかゝり侍りしか。老母が歎きもいたはしと申しければ。さしも猛き武士なれども。判官涙をはら〳〵とゞ流し給ひける。

まことに思ふもことわりなり。敵を亡ぼさん事は年月を經るべからず。義經世にあらば。汝兄弟をこそ左右に立てんと思ひつるにて。手に手をとりあはせて泣き給へば。繼信あなうれしと。うれを最期の言葉にて。息絶にけるこそ無慙なれ。これを聞きける兵共も。鎧の袖をしぼりけり。」

日も西山にかたぶきける上。判官には多くの郎等の中に。四天王とて。殊に身近く頼み給へるものは。四人あり。鎌田兵衛政清が子に鎌田勝太盛政。同じき藤二光政と。佐藤三郎兵衛繼信。弟に四郎兵衛忠信なり。

藤太盛政は一谷にて討たれぬ。一人かけたる事をこそ日頃なげきしに。けふ二人を失ひて。今は軍もせんなしとて。繼信光政が死體を舁きて。當國の牟禮高松といふ柴山に歸り給ひて。其邊を相尋ねて僧を請じ。薄墨といふ馬に金覆輪の鞍おいて申しけるは。心しづかならば念頃にこそ申すべけれども。かゝる折節なれば力なし。此馬鞍を以て御坊庵室にて卒都婆經書き。佐藤三郎兵衛の尉繼信。鎌田の藤二光政と回向して。後世を吊ひ給へとて。舍人に牽かせて僧の庵室にぞくられけり。

此馬といふは。貞任がぞきぐろのすゑとて。黑き馬の少しちひさかりけるが。早ばしりの逸物なり。多くの馬の中に秀衡ことに秘藏なりければ。いくさにはよき馬こそ武士の寶なれば。山をも河をもこれに乘り敵を攻め給へとて。判官奥州を立ちける時まゐらせたる馬なり。宇治川をも渡し。一の谷をも落せしこと。この馬なり。一度も不覺なかりければ吉例と申しけるを。判官五位の尉になりけるに。この馬に乘りたりければ。私には太夫ともよびけり。片時も身をはなたじと思ひ給ひけれども。せ

めても繼信光政が悲しさに。中有の道にも乘れかしとて泣かれたり。兵どもこれを見て。この君の爲めに命を失はんこと。惜しからずとぞ勇みたる。

源氏は牟禮高松に陣を取り。平家は屋島燒內裡に陣を取る。源平の兩陣三十餘町を隔てたり。源氏はいくさに志つかれて鎧を解いて枕とし。鎧を脫いでよりふしたり。伊勢の三郎義盛ぞ。よもすがら夜討もぞある。打ちとけ寐たまふなよ〳〵と。立ちわたり〳〵觸れあかしける。

平家は夜討の評定あり。敵は三百餘騎にはよもすぎじ。今宵はいくさにつかれて柴山にこう伏したるらめ。味方の軍兵一千餘騎。足輕に出で立ちて高松山をひきまはし。一人もゝらさずなどか夜討にせざるべきと。此義志かるべしとぞ。思ひ〳〵に出で立ちける程に。美作の國の住人惠美の太郎盛方と。越中の二郎兵衛盛繼と。先陣後陣を爭ふほどに。うの夜もむなしく明けにけり。夜討はまことに然るべかりけれども。これも平家の運の盡くる故なり。

廿日の夜もすでに曉になり如。野寺の鐘もうちひゞき。やもめがらすのうかれ聲。旅寐の眠を驚かす。判官いうぎれきなほり。いくさにはよくつかれにけり。しばしと思ひたればはやあけにけり。いざや殿原よせんとて。七十餘騎にて燒內裡のまへ。平家の陣へおしよせて。鬨の聲を發す。

平家も期したりければ。聲を合はせ楯つきむかうてさゝへたり。平家には二郎兵衛。惡七兵衛。五郎兵衛。三郎左衛門等三十人ばかりかちだちになつて。熊手ないがま手ぼこ長刀を持つて。馬をも人をも嫌ふ事なく。さしたりついたり切つたり薙いだり。辻風の吹くが如くにくるひまはる。おもてをむくべきやうもなし。

源氏には熊谷。平山。畠山。佐々木。三浦。土肥。金子。椎名。横山。片岡等三十餘騎。ないがま長刀に恐れて。馬の足一所にとめず。弓手にまはし馬手に馳せ。さしつめ〳〵おふものの射にこう射たりけれ。兵五六人射伏せられて。平家こらへず船に來りて漕ぎ出だす。能登守又二十騎

ばかり船よりれり。芝築地を木陰として。引きとりさしつめさんくに射ければ。きのふ矢風は負ひぬ。進む者もなし。武藏坊常陸坊古山法師にて。くきやうの長刀の上手にて。七八人かちだちになり。長刀十文字にとり。箒を以て庭を掃ふが如く薙ぎ入りければ。平氏の軍兵十餘人薙ぎふせたり。能登守むげに間近く見ねければ。うちかゝる所にいぶせくや思はれけん。又船に乘つてさし出だす。さるほどに大風に恐れてとぞまりたりける軍兵。あとめについて屋島の浦へ馳せ來るなり。（源平盛衰記）

宇治川合戰

作者しらず

壽永三年正月十一日。木曾左馬頭義仲院參して。平家追討のために西國へ發向すべき由奏聞す。同じき十三日既に門出すと聞ねしかば。鎌倉の前右兵衛佐頼朝。木曾が狼藉しづめんとて。範頼義經を先として。數萬騎の軍兵をさし上せられけるが。既に美濃の國伊勢の國にも着くと聞ねしかば。木曾大に驚き。宇治勢多の橋を引きて軍兵共を分ち遣す。折節

勢こうなかりけれ。先づ勢多の橋へは追手なればとて。今井四郎兼平。八百餘騎にて差し遣す。宇治橋へは仁科高梨山田次郎。五百餘騎にて遣しけり。一口へは伯父の志田の三郎先生義敎。三百餘騎にて向ひけり。さる程に東國より攻めのぼる追手の大將軍には。蒲の御曹司範頼。搦手の大將軍には九郎御曹司義經。宗徒の大名三十餘人。都合其勢六萬餘騎とぞ聞ねし。

其頃鎌倉殿には池嗄磨墨とて聞ゆる名馬ありけり。池嗄をば梶原源太景季頼りに所望申しけれども。是は自然の事あらん時。頼朝が物具して乘るべき馬なり。是も劣らぬ名馬ぞとて。梶原には磨墨をこう賜びてけれ。」其後近江の國の住人佐々木四郎の御暇申しに參られたるに。鎌倉殿如何思召されけん。所望の者はいくらありけれども。其旨存知せよとて生嗄をば佐々木にたぶ。佐々木畏りて申しけるは。今度此御馬にて宇治川の眞先渡し候ふべし。若し死にたりと聞し召され候はゞ。人に先をせられてけりと思召され候ふべし。未だ生きたりと聞し召し候はゞ。定めて先

陣をば。高綱がしつらんものをと思召され候へとて。御前を罷り立つ。參會したる大名小名。あつぱれ荒凉の申しやうかなとぞ。人々さゝやきあはれける。

おの〳〵鎌倉を立ちて足柄を經て行くもあり。箱根にかゝる勢もあり。思ひ〳〵に上る程に。駿河の國浮島が原にて。梶原源太景季高き所に打ち上り。暫くひかへて多くの馬共を見けるに。思ひ〳〵の鞍置かせ。いろいろの鞦かけ。或は乘口に牽かせ。或は諸口に牽かせ。幾千萬といふ數を知らず。引き通し〳〵しける中にも。景季が賜はりたる磨墨に勝る馬こうなかりけれと。嬉しう思ひて見る所に。こゝに生喰と思しき馬こう一騎出で來たれ。金覆輪の鞍置かせ。小總の鞦かけ。白轡はげ白泡かませて。舍人數多附けたりけれども。猶牽きも撓めず。跳らせてこう出で來たれ。

梶原打ち寄りて。是は誰が御馬ぞ。佐々木殿の御馬に候と申す。佐々木は三郎殿か四郎殿か。四郎殿の御馬に候とて牽き通す。梶原安からぬこと

となり。同じやうに召し使はるゝ景季を。佐々木に思召し替へられけるこう遺恨の次第なれ。今度都へのぼり。木曾殿の御内に四天王と聞ゆる。今井。樋口。楯。根井と組んで死ぬるか。然らずは西國へ向ひて。人當一千と聞ゆる。平家の侍共と軍して死なんとこう思ひしに。此御氣色にてはうれも詮なし。せんずる所。こゝにて佐々木を待ち受け。引き組み差しちがへ。よき侍二人死にて。鎌倉殿に捐とらせ奉らんと。つぶやきてこう待ちかけたれ。

佐々木何心もなう歩ませて出で來り。梶原押し並べてや組む。向ふ樣にあてや落すべきと思ひけるが。先づ詞をぞかけゝる。いかに佐々木殿は。生喰賜はらせ給ひて上らせ給ふなといひければ。佐々木あつぱれこの人も。內々所望申しつると聞きしものをと思ひ。さ候へば今度此御大事に罷り上り候ふが。定めて宇治勢多の橋をや引きたるらん。乘りて河を渡すべき馬はなし。生喰を申さばやとは存じつれど。御邊の申させ給ふだに。御許されなきと承りて。まして高綱などが申すともよも賜はらじと

思ひ。後日にいかならん御勘當もあらばあれと存じつゝ。曉立たんとての夜。舍人に心を合はせて。さしも御秘藏の生ii を。ぬすみすまして上りたり。さらばいかに梶原殿といひければ。梶原此詞に腹かいて。ねつたいさらば。景季も盜むべかりけるものをとて。どつと笑ひてゞのきにける。

佐々木四郎の賜はられたる御馬は。黑栗毛なる馬の極めて太う逞しきが。馬をも人をもあたりを拂ひて喰ひければ。生　とはつけられたり。八寸の馬とゞ聞ひし。梶原が賜はつたりける御馬も。極めて太う逞しきが。鹹に黑かりければ。磨墨とはつけられたり。何れも劣らぬ名馬なり。

さるほどに東國の勢。追手搦手二手に分れて攻め上る。追手の大將軍には蒲の御曹司範頼。相伴ふ人々。武田の太郎。加賀見の次郎。一條の次郎。板垣の三郎。稻毛の三郎。榛谷の四郎。熊谷の次郎。猪股の小平六を先として。都合其勢三萬五千餘騎。近江の國野路篠原にゞ陣を取る。」搦手の大將には九郎御曹司義經。同じく伴ふ人々。安田の三郎。大內の

太郎。畠山の庄司次郎。梶原源太。佐々木四郎。糟屋の藤太。澁屋右馬允。平山の武者を先として。都合其勢二萬五千餘騎。伊賀の國を經て宇治橋の詰にゞ押し寄せたる。宇治も勢多も橋を引き。水の底には亂杭打つて大綱張り。逆茂木繫いで流しかけたり。

頃は睦月廿日餘りのことなれば。比良の高嶺志賀の山。昔ながらの雪も消ねる。谷々の氷うち解けて。水は折節まさりたり。白浪ねびたゝしう漲り落つ。瀨枕大きに瀧鳴りて。逆まく水も早かりけり。

夜は既にほの〴〵と明け行けど。川霧深く立ち籠めて。馬の毛も鎧の毛もさだかならず。大將軍九郎御曹司義經。河の端に打ち出で。遙の水の面を見渡いて。人々の心を見んとや思はれけん。淀一口へや向ふべき。又河內路へや廻るべき。水の落足をや待つべき。如何せんと宣ふ所に。こゝに武藏の國の住人畠山の庄司次郎重忠。生年廿一になりけるが。進み出でゝ申しけるは。此河の御沙汰は。鎌倉にてもよく〳〵候ひしゞかし。日頃知も召されぬ海河が。俄に出で來ても候はゞこそ。近江の湖の

末なれば。待つとも〳〵水ひまじ。橋をば又誰かは渡して參らすべき。去ぬる治承の合戰に。足利の又太郎忠綱。生年十七歳と名のつて渡しけんも。鬼神にてはよも候はじ。重忠先づ瀬踏仕り候はんとて。丹の黨を宗として五百餘騎。ひし〳〵と轡を馳せ並ぶる所に。こゝに平等院の坤。橘の小島が先より武者二騎。引き懸け〳〵出で來たり。一騎は梶原源太景季。一騎は佐々木四郎高綱なり。人目には何とも見えざりけれども。内々先に心を懸けゝれば。梶原は佐々木に一段ばかりず進んだる。佐々木いかに梶原殿。此川は西國一の大河ぞや。腹帶の延びて見え候ふず。しめ給へといひければ。梶原さもありなんとや思ひけん。手綱を馬のゆがみに捨て。左右の鐙を踏みすかし。腹帶を解きてずしめたりける。佐々木うのひまに。うこをつと馳せ抜いて。河へさつとず打ち入れたる。梶原たばかられぬとや思ひけん。やがて續いて打ち入れたり。梶原いかに佐々木殿。高名せうとて不覺し給ふな。水の底には大綱あるらん。心得給へといひければ。佐々木げにもとや思ひけん。太刀を抜いて。馬の足にかゝりける大綱共を。ふつ〳〵と打ち切り〳〵。宇治川早しといへども。生嗟といふ世一の馬には乘つたりけり。一文字にさつと渡いて。向の岸にず着きにける。梶原が乘つたりける磨墨は。川中よりのだめがたに押し流され。遙の下より打ち上げたり。

其後佐々木鐙蹈張り立ち上り。大音聲をあげて。宇多天皇の九代の後胤。近江の國の住人佐々木三郎秀義が四男。佐々木四郎高綱宇治川の先陣ずや。木曾殿の御方に我と思はん人々は寄りあへや。見參せんとてをめいてかゝる。

其後畠山五百餘騎打ち入れて渡す。向の岸より山田の次郎が射ける矢に。畠山馬の額をのぶかに射させぬれば。川中にて弓杖を突いて下り立つたり。岩浪兜の鍬へ颯と押し掛けゝれども。畠山之を事ともせず。水の底をくゞつて。向の岸にず着きにける。打ち上らんとする所に。後より物こうむづと控へたれ。誰ずと問へば重親と答ふ。大串か。さん候。大串の次郎は。畠山がためには烏帽子にず候ひける。餘りに水が早うて。馬

をは川中にて押し流されぬ。力及ばで漸く是までは着き參りて候と申しければ。畠山いつも和殿原がやうなる者は。重忠にこう助けられんずれとて。大串をつかんで。岸の上へぞ投げたる。

投げ上げられてたゞなほり。太刀を拔いて額にあて。大音聲をあげて。武藏の國の住人大串重親。宇治川の徒歩立の先陣ぞやとぞ名乘つたる。敵も味方も之を聞いて。一度にどつとぞ笑ひける。

其後畠山乘替に乘つて。をめいて駈く。こゝに魚綾の直垂に緋威の鎧着て。連錢蘆毛なる馬に。金覆輪の鞍を置いて乘つたりける武者一騎。まつさきに進んだるを。畠山こゝに駈くるは何者ぞ。名乘れやといひければ。是は木曾殿の家の子に。長瀨判官代重綱と名のる。畠山いでさらば今日の軍神に祝はんとて。押し並べむづと組んで引き落し。我乘つたりける鞍の前輪に押しつけ。ちつとも動かさず。首捻ぢ切つて本田の次郎が鞍の取付にこうつけさせけれ。

之を始めて宇治橋固めたりける兵共。かしこゝにて返し合はせ防ぎ戰ふといへども。東國の大勢皆渡いて攻めければ。力及ばず。木幡山伏見を差してぞ落ち行きける。勢多をば稻毛三郎重成がはからひにて。田上の供御の瀨をこうわたしけれ。（平家物語）

武藏坊辨慶

辨慶思ひけるは。人の重寶は千うろへて持つぞ。奥州の秀衡は名馬千匹鎧千兩もつ。松浦の太夫は胡籙千腰弓千張。かやうに重寶を揃へてもつに。われ〳〵は代りのなければ。かへてもつべきやうもなし。せんずるところ。夜に入りて京中にたゝずみて。人のはきたる太刀千振とつて我重寶にせんと思ひ。よな〳〵人の太刀を奪ひとる。しばしこそ有りけれ。當時洛中にたけ一丈ばかりある天狗法師のありきて。人の太刀を取るとぞ申しける。

かくて今年も暮れければ。次の年の五月の末。水無月の始までに多くの太刀を取りたり。樋口烏丸の御堂の天井におく。數へ見たりければ。九百九十九腰こう取りたりけれ。

作者しらず

六月十七日。五條の天神に參りて。夜と共に祈念申しけるは。今夜の御利生に。よからん太刀をあたへてたび給へと祈請し。夜ふかければ。人の家の築地のきはにたゝずみて。天神へ參る人の中によき太刀もちたる人をゞ待ちぬたる。

曉方になりて堀河を下りに行きければ。おもしろく笛の音こゑ聞こけれ。辨慶これを聞きて。「おもしろや小夜ふけて天神へ參る人の吹く笛は。法師やらん男やらん。よからん太刀をもちたらば取らんと思ひて。笛の音の近づきければ。さしくゞみて見れば。いまだ若き人の白き直垂に。胸板を白くしたる腹卷に。黄金づくりの太刀の心も及ばぬをはかれたり。」辨慶これを見て。あはれ太刀や。なにともあれ。取らんずるものをと思ひて待つ所に。後に聞けばおうろしき人にてゞ有りける。辨慶はいかでか知るべき。御曹司は見給ひて。あたりに目をもはなたれず。木のもとを見給ひければ。けしからぬ法師の太刀わきばさみて立つたるを見給へば。きやつはたゞものならず。此頃都に人の太刀を奪ひ取りしはきやつにて有ると思はれて。少しもひるまずかゝり給ふ。

辨慶さしもけなげなる人の太刀をだにも奪ひ取る。まして是ほどなるやさをとこ。ふりてこはゞ姿にも聲にもおぢて出ださんずらん。げにくれずはつきたふし。奪ひとらんと支度して。辨慶あらはれ出でゝ申しけるは。只今しづまりて敵をまつ所に。けしからぬ人のものゝぐして通り給ふこゝろ怪しく存じ候へ。さうなく之こゝろ通すまじけれ。しからずは御曹司之をきゝ給ひて。この程さるをこのものありとは聞きれよびたり。さうなく之こゝろとらずまじけれ。ほしくはよりて取れとゞ仰せられける。さては見參にまゐらんとて。太刀をぬいてとんでかゝる。御曹司も小太刀をぬいて築地のもとに走りより給ふ。武藏坊これを見て鬼神ともいへ。當時われを相手にすべきものこゝろおぼえねとて。もつてひらいて丁どうつ。御曹司きやつはけなげものかなとて。稻妻の如くに弓手のわきへつと入り給へば。うちひらく太刀にて築地の腹にきつさきうち立て。ぬかんとしけるひま。御曹司走りよりて。弓手の足をさし出だして辨慶が胸

をしたゝかに蹈み給へば。持ちたる太刀をからりと捨てたるを取りて。にいやといふ聲のうちに。九尺ばかりありける築地に。ゆらりと飛びのぼり給ふ。辨慶胸いたくふまれぬ。鬼神に太刀とられたる心地してあきれてゞ立つたりける。

御曹司これより後にかゝる狼藉すな。さるをこの者ありとかねて聞きつるゞ。太刀も取りてゆかんと思へども。ほしさに取りたるかと思はんずるほどにとらするゞとて。築地のおほひに押しあてゝ。ふみゆがめてゞ投げかけ給ふ。

太刀とつておしなほし。御曹司の方をつらげに見やりて。ねんなく御邊はせられて候ふものかな。常に此邊におはする人と見るゞ。今宵こう仕損ずるとも。是より後においては心ゆるすまじきものをと。つぶやきつぶやきゞ行きける。

御曹司これを見給ひて。なにともあれ。きやつは山法師にてゞ有るらんと思召しければ。山法師人の器量に似ざりけりとのたまへども。返事もせず。なにともあれ。築地よりおり給はん所を斬らんずるものをと思ひて待ちかけたり。築地よりゆらりと飛びおり給へば。辨慶太刀うち振つてつとよる。九尺の築地よりれり給へるとおぼゆしが。三尺ばかりおちつかで中におはしけるが。又とつてかへし。上にゆらりと飛び上り給ふ。

辨慶は今宵は空しく歸りけり。

頃は六月十八日なるに。清水の觀音に上下參籠ず。辨慶も何ともあれゆふべの男清水にこりあらんに。參りて見ばやと思ひて參りけり。あからさまに清水に參り。總門にたゝずみて待ちけれども見ね給はず。今宵もかくて歸らんとする所に。いつものくせなれば。夜ふけて清水坂の邊に例の笛こう聞えけれ。

辨慶きゝて。あらおもしろの笛の音や。あれをこう待ちつれ。此觀音と申すは。坂上の田村丸の建立し奉りし御佛なり。我三十三べんの身を變じて。衆生のねがひを滿てずは。祇園精舍の雲にまじはり。ながく生々を取らじと誓ひ。我地に入らんものには福德をさづけんと。誓ひ給ふ御

佛なり。されども辨慶は福德もほしからず。たゞ此男の持ちたる太刀をとらせてたべと祈誓して。門前にて待ちかけたり。

御曹司ともすればいぶせくおぼしめしければ。坂の上を見あげ給ふに。かの法師こうきのふに引きかへて。腹まき着て太刀脇にはさみ。長刀杖につき待ちかけたり。

御曹司見給ひて。くせものかな。又今宵も是にありけるやと思ひ給ひて。少しも退かで門をさして上り給へば。辨慶唯今參り給ふ人は。きのふの夜天神にて見參に入りて候ふ御かたにやと申しければ。御曹司さる事もやとのたまへば。さて持ち給へる太刀をばたび候ふまじきかとゞ申しける。

御曹司いくたびもたゞは取らすまじ。ほしくはよりて取れとのたまへば。いつも強言葉（こはことば）かはらざりけりとて。長刀うちふり眞下りにをめいてかゝる。御曹司太刀ぬきあはせてかゝり給ふ。

辨慶が大長刀をうちながして。手なみのほどを見しかば。あやときもおけず。さもあれ手にもたまらぬ人かなと思ひけり。

御曹司よもすがらかくて遊びたくあれども。觀音に宿願ありとてうち行き給ひぬ。

辨慶ひとりごとに。手に取りたるものを失ひたる心地する。とゞ申しける。

御曹司なにともあれ。きやつはけなげなる者なり。あはれ曉にてあれかし。持ちたる太刀長刀うちおとして。薄手おふせて生捕にして。ひとりありくはつれ〴〵なるに。相傳にしてめしつかはゞやとゞおぼしめしける。

辨慶此たくみをしらず。太刀に目をかけて跡につきてゞ參りける。清水の正面に參りて。御堂の內を拜み奉れば。人のつとめの聲はとり〴〵なりと申せば。ことに正面のうちの格子のきはに。法華經の一の卷のはじめを登く讀み給ふ聲を聞きて。辨慶おもひけるは。あら不思議やな。此經よみたる聲は。ありつる男の。にくいやつといひつる聲にさも似たる

物かな。よりて見んと思ひて。もちたる長刀をば正面のなげしの上にさし上げて。はきたる太刀ばかりもちて。大勢のゐたる中を。御堂の役人にて候。とほさせ給へとて。人の肩をもきらはず。おさへて通りけり。御曹司の經ありばして居給へるうしろに。ふみはたばりて立ちあがりけり。みあかしの影より人これをみて。あらいかめしの法師の。たけの高さよとぞ申しける。

なにとして知りて。是まで來たるらんと御曹司は見給へども。辨慶は見つけず。唯今までは男にておはしつるが。女の裝束にて衣うちかづき居給ひけり。武藏坊思ひわづらひてぞ有りける。中にぜひなく推參せばやと思ひ。太刀の尻鞘にて脇の下をしたゝかに突き動かして。ちごか女房か。これも參りにて候ふぞ。あなたへよらせ給へと申しけれども。返事もし給はず。辨慶されば。こうたどものにはあらずありつる人ぞと思ひ。又したゝかにこうついたりけれ。

其時御曹司仰せられけるは。不思議のやつかな。おのれがやうなるこつ

じきは。木のもと萱のもとにて申すとも。佛の方便にてましませば。きこしめし入れられんぞ。かたゝ〳〵おはします所にて狼藉なり。うこのき候へと仰せられけれども。辨慶なさけなくものたまふものかな。きのふの夜より見參に入りて候ふかひもなく候。うなたへ參り候はんと申しもはたさず。二疊のたゝみをのりこえ御そばへ參る。人々推參尾籠なりとにくみける。

かゝりける所に御曹司の持ち給へる。御經をおつとりて。さつと開いて。あはれ御經や。御邊の經か人の經かと申しけり。

されども返事もし給はず。御邊もよみ給へ我もよみ候はんといひて讀みけり。辨慶は西塔に聞えたる持經者なり。御曹司は鞍馬のちごにてならひ給ひたれば。辨慶が甲の聲。御曹司の乙の聲。入りちがひて。二の卷半卷ばかりぞよまれたる。參る人のゐいやつきものはくとしづまり。行く人のすゞの聲もとゞめて。是を聽聞しけるまゝ。世間すみわたりて尊さ心も及ばず。

しばらくありて。知る人のあるに立ちよりて。又こう見參せめとて立ち給ふ。辨慶これを聞きて。現在目の前におはする時だにもたまはらぬ人の。いつをか待ち奉るべき。御出で候へとて。御手をとつて引きたて。南おもての扉のもとにゆきて申しけるは。持ち給へる太刀の眞實ほしく候に。うれたび候へと申しければ。是は重代の太刀にてかなふまじ。さ候はゞいざゝせ給へ。武藝に付きて。勝負次第に給はり候はんと申しければ。それならば參りあふべしとのたまへば。辨慶やがて太刀をぬく。御曹司もぬきあはせ。さん〳〵に打ちあふ。

人これを見て。こはいかに御坊の。是ほど分内もせばき所にて。しかもをさなき人とたはぶれは何事ぞ。其太刀さし給へといへども。聞きも入れず。

御曹司上なる衣をぬぎすて給へば。下は直垂腹卷をぞ着給へる。此人もたゞ人にはおはせざりけりとて。人目をすます。女や尼わらべども。あわてふためき傍より下へ落つる者もあり。御堂の戸をたて入れじとする者もあり。

されども二人はやがて舞臺へ引いておりあうて戰ひける。ひいつすゝんづ打ちあひたる間。はじめは人もおぢてよらざりけるが。後にはおもしろさに。行道をするやうにつきてめぐり之を見る。よそ人いひけるは。うも〳〵ちごがまさるか法師がまさるか。いやちごこうまさるよ。法師はものにてもなきぞ。はやよわりて見ゆるぞと申しければ。辨慶これを聞きて。さてはゝや我は下になるござんなれとて。心ぼうく思ける。御曹司も思ひきり給ふ。辨慶は思ひきつてぞ打ちあひける。

辨慶すこしうちはづす所を。御曹司はしりかゝつてきり給へば。辨慶が弓手の脇の下に。きつさきを打ちこまれてひるむ所を。太刀のむねにてさん〳〵にうちひしぎ。まくらに打ちふして上に打ちのりぬて。さて從ふやいなやと仰せられければ。是も前世の事にてこう候ふらめ。さらば從ひまゐらせんと申しければ。着たる腹卷を御曹司重ねて着給ひて。ふたふりの太刀をとり。辨慶をさきに立てゝ。其夜のうちに山科へ具して

れはしまし。きずをいやして其後つれて京へれはして。辨慶と二人して平家をねらひ給ひける。

其時見參に入りはじめてより。心ざし又ふたつなく。身にうふ影の如くつきうひ奉り。みとせに攻めれとし給ひしにも。度々の功名をきはめぬ。奥州衣河の最期の合戰まで御供して。つひに討死してける武藏坊辨慶これなり。（義經記）

日記の内

二月一日。夜更くるほど。臺盤所より參りて。鬼の間の布障子かけんと思ひしかども。燈火の影かすかにて。常よりはいかにやらんれぼにて。朝がれひより常の御所へ參りたれば。宮内卿佐殿。兵術督殿。勾當内侍殿など候はせ給ふ。

御所も。いまだ御夜にもならせれはしまさず。御手習などありて。れもしろく思はん詩。書きて參らせよと仰言あれば。蘆葭洲裏孤舟夢と書きて。うばに辨の内侍。

辨の内侍

身ひとつの　うれひや波に　沈むらん
　あしのしたねの　夢もはかなし

など書きて。秋の詩はいづれもれもしろくてこうと。さま〳〵申すほど候はんに。公忠の中將候ふが。誠にさわぎたる氣色にて。笑止の候。皇后宮の御方に。火のといふ。あさましともれろかなり。あまり現ともなくて。柳の薄衣。裏山吹の唐衣着たりしを脱ぎて。袴ばかりにて局へすべりてあらゝかに敲きて。いうぎ竿なる梅重の衣に。蒲萄染の唐衣かさねて參りたれば。勾當の内侍殿。やがて夜のれとゞへ入りて。劍璽取り出だしまゐらす。油の小路の門の方へ行く。

御所も二位殿抱きまゐらせて。中納言少將内侍は。大原野の使に立ちて。こゝろわびしくて。局に臥したりけるが。荒くたゝく音に驚きて。火と聞きて。急ぎ御所へ參りたりければ。人もれはしまさず。烟は滿ちたり。何方へ行幸もなりつらんと。あさましくて迷ひありく程に。夜のれとゞの一間にやといふ人あれば。けものにやと。恐ろしながら行きければ。

何やらん御衣に薄御衣重ねて。さしものさわぎの中にも。さまよくもて隠して。御ぐしのかゝり。御額の髪。御たけまでかゝりたり。宣旨殿御太刀もちて。これは何處へか具しまゐらすべき。按察三位殿に申せと仰せらるれども。いづくともこれも知り候はぬとて。油の小路表のつまどの方へ出でたれば。ひしと人々れはします。

かくと申せば。兵衛督殿。導き參らせんとてれはしましぬ。一番に權大納言殿の車參りたるに。御所皇后宮。中納言の佐殿。宮内卿の佐殿乘らせ給ふ。門の外にてゞ。御輿にはめしうつりける。皇后宮冷泉大納言の肩をふまへて。めしうつるべきよし侍りけれども。何となきさまにて。やす〳〵とゞめしうつりける。

權大納言。萬里小路。冷泉大納言など。そのまぎれにもゆゝしげに。いうめきあはれけるに。中納言の佐殿。よく御かいしやくして。下簾にてとかく紛はしてゞ。御輿にはめしける。夜目にも御事柄。たゞの人にはに見ゆさせ給はざりしとゞ。後にかたり給ひし。

劍璽は。二位殿のめしたる御車に。勾當辨の内侍持ち參らせて乘りたりしを。御輿にもれはしまさず。取り出だし參らせたりけるにやと。何の中にも騒動にてありけるに。持ちて出で給ひつる人。れはしましつといひけるとて。誰か見つるといはれけるに。兵衛の佐殿。一定勾當の辨取り出で參らせつるとありければ。勾當の辨めしたる御車はいづれゞ〳〵と。馬をはやめて。走りちがひ〳〵尋ねられし。

何事ならんと思へば。劍璽はれはしますか〳〵とゞあつたきて。聲の變るほど尋ねれはしますといふに。猶一定にやと問はれし。實にも理りなりけん。錠はのりときゞ。取り出だし參らせける。大納言殿たち移し馬に乘りながらあるは。弓持ち矢負ひなどして門に立たれし。夢の心地していとあさまし。

さりながら。延喜天暦のかしこき御代にも。數多たび侍りけるなど。仰せらるゝ人々もありしかば。辨の内侍。

燒けぬとも　またこゝ立てめ　宮ばしら

よしや烟の　あともなげかし

富の小路殿内裏になりて。廣御所のつまの紅梅盛なりしころ。月のあぼろなる夜。誰とはなくて。白き薄葉に書きて。結びつけられたりし。

色も香も　かさねてにほへ　梅の花

こゝのへになる　宿のしるしに

この御返事は院の御所へ申すべし。と仰せられしかば。辨の内侍。

色も香も　さこそ重ねて。にほふらめ

九重になる　やどの梅が枝

勾當の内侍殿の局は。女院御所なりけるほど。宰相殿と申す人の局にてありける。その人の許より。梅や盛なるらんと尋ねたる返事に。勾當の内侍にかはりて。辨の内侍。

色もかも　なれし人をや　しのぶらん

見せばや　梅の　花のさかりを

返事宰相殿に代りて。權大納言。

ながめばや　なれこし梅の　花の香も

今こゝのへに　色はうふらん

この歌ども。太政大臣殿聞かせ給ひて。さしもゆゝしき色も香もの御秀歌にかよひて。色も香もとあるわろし。又御返事も。九重になるといみじくつゞけられたるに。今こゝのへとよみたる。正しかるべからず。共におとゝなりと仰せらるゝと聞きし。面目なさをかくして。辨の内侍。

にほひなき　色をかさねて。梅の花

つらくも人に　とがめられぬる（辨内侍日記）

深雪の朝

橘成季

白河の院。深雪の朝。雪見に御幸あるべしとて。御供の人少々召さるゝ事。ほのきこえし程に。やがて出御ありて。れもしろき雪かな。いづかたへかむかふべき。小野皇太后宮のもとへ向はゞや。と仰せられけるを。御隨身承りて。從者を馬にのせて。彼宮へ馳せまゐらせて。かゝる事に。既に御車奉りて候ふなり。御用意候ふべしと申したりければ。紅の衣五

具ありけるを。せわりにぶつと切りて。寢殿十間になん出だされたりける。

みづから入りて御覽ずる事もあらば。いかゞと申す人ありければ。皇太后宮。雪見る人は內へ入ることなしとて。さわぎたる御氣色なくてなんれはしましける程に。やがて御幸なりて。御車やり入れて。階隱しの間にさしよせて。れはしましければ。御酒をなん勸め奉られける。

朽葉のかざみ着たる童二人。一人は沈の折敷に玉の盃。銀の皿に金の橘一ふさを取られたるを持ちたりけり。一人は片口の銚子に。酒を入れて持ちたり。二人の童。寢殿の前をへて。階の子を斜にれり下りて。御車へまゐりけるさま。いみじく饌になん見ゆ侍る。酒はうるはしうならせ給ひける。橘は季通御供に候ひけるに賜はせけり。

上皇かへらせおはしましけるまゝに。ゆかしくなつかしき世にてこうおはしましけれとて。莊一所まゐられたりければ。只今御幸なるよし告げ彦らせたりける。御隨身になんあづけ給ひける。

同じ院鳥羽殿にれはしましける時。昨日より雪ふりて。今日一日ふりくらしける。夜半ばかりまで猶降りければ。院れきさせ給ひて。備後守季道が御前にふしたりけるに。雪はいくらほどたまりたるゞ。なほふるかと見て參れと仰せられければ。吹きためたる所は。一尺にあまり候。庭は八九寸ばかり候と申しければ。ゆゝしき大雪にこそ。只今尺に滿たんずと仰せられて。近衛舍人の近くゐたるやある。まかるべき近衛司の近きは誰かあるなど。御氣色つかせ給ひてれはしける程に。鐘の音まければ。後夜かなと仰せられて。まばしありける程に。さうめきたる人の。さや〳〵として參る音しければ。たうと見てまゐれと仰せられければ。急ぎ出でゝ見れば。淡路守盛長。殿下の御使として參りて候。以ての外の大雪にてこう候ふめれ。定めて御覽じ候ふらん。只今參り候ふなりと。申させ給ひたりければ。御手をはたとうたせ給ひて。さ思ひつる事こう。いかゞせんずるとさわがせ給ひて。殿上人御隨身のしかるべきものども只今急ぎ參れと。召しに遣せと仰せられて。やがて御裝束四五具取り出

ださせ給ひて。いづれをかめすべきとて。御髮かゝせれはしまして。引きつくろひてれはしますが。夜のしら〳〵と明くる程に。殿下黑き馬にうつしれきたるに奉りて。敎時に口をさせてまゐられ給ひたりければ。やがて出御ありて。馬場殿へ御幸ならせ給ひて。秋の山の方へ入らせ給ひけるに。くぼみたる所に雪のふり積みたるをしらせ給はで。殿下の御馬をうち入れさせ給ひたりければ。かいこづむ所にて。御隨身敎時有長。穴ありと申したりけるを。院還御の後。關白の馬のつまづきたるを。隨身がいかにやりたりつるこうれもしろかりつれと。仰事ありけり。（古今著聞集）

三千三百三十三度の拜　同じ人

妙音院入道殿仰せらるべき事ありて。孝道朝臣の若かりける時。今日たがはで祗候すべきよし。仰せ含められたりけるに。孝道仰を承りながらうせにけり。

ひめもす遊びありきて。夕に歸り參じたりければ。入道殿大にいからせ給ひて。御勘發のあまりに。贊殿の別當なりける侍を召して。麥飯に鰯合せて煑て。只今調進すべきよし仰せられければ。即ち參らせたりけるを。孝道にくはせられけり。日暮し遊び困じて。物のほしかりける時にて。かひ〳〵しく皆食ひてけり。

うの時いよ〳〵まかり給ひて。三千三百三十三度の拜をせよと仰せられければ。孝道本よりすくよかなる者にて侍るうへに。只今物よくゝひて。力もありておぼえけるまゝに。いとやすゝとしはてにけり。

うの時入道殿頭がきをせさせ給ひて。安からぬものかな。法師は死なばやと仰せられたりけるに。上臈しかりける御勘當なりかし。

この飯菜を。うとましき事に思召し取りたる事は。御遠行の時しろしめしたりけるとかや。さなくては。誠にいかでかさる物ありともしろしめすべき。（同書）

八幡太郎　作者しらず

後冷泉院の御時。陸奥守源頼義鎭守府の將軍を兼ねて。貞任宗任を攻め

けるに。永承の末より度々合戰につかれたりけるが。天喜五年十一月に千三百餘騎の兵を發して襲ひよせけるに。貞任等四千餘騎の勢を集めて。舅金爲行が河堰の柵に籠りて。是を防ぎたゝかふ時。雪ふり風烈しくして。味方の兵凍につかれたりける上。勢もこよなう劣りたる間。將軍の軍大に破れて。死する者數を知らず。兵四方に散滿して。殘る所僅に六騎。長男義家。修理少進藤原景道。清原貞廉。藤原季範。大宅光任。藤原則明等なり。

貞任が軍これを見て攻めよせ。矢をとばす事雨のごとし。しかるを義家防ぎ戰ふ既に神の如く。若少の齡にて大なる矢を射る。その矢に當りたるもの。必ずたふれ伏さずといふ事なし。四重に圍める軍をかけ破りて。かこみの中を出でぬ。中へ入る事度々なり。電光の如くして。目を合するものなし。貞任これを感じて。八幡太郎と名づく。

斯くの如く度々戰ふ間。貞任が軍僅に二百餘騎になりぬ。猶將軍をかこみて。矢を降らす事隙なし。斯くの如く相戰ふの間。將軍既にせまりて。

殆ど免れがたかりければ。義家光任等五六騎して。命を捨てゝ四方をかくる間。貞任等堪へず引き退く。

こゝに佐伯經範といふものありけり。軍破れて後。將軍の行方を志らず。逃げ散りたる步兵どもに。將軍の在所を問ふ。貞任等にかこまれて。皆遁れがたしといふ。經範天に仰ぎてかなしむ。早將軍に仕へて。三十餘年をへたり。かの命を失ふ時に臨みて。我一人生くべからずといひて。敵の方へかけ入りぬ。郎黨ども二三人。同じく相隨ひてかけ入り。多くの敵を打ち取りて。遂に討死しぬ。

藤原茂頼といふものあり。將軍の行方を志らず。疑ひなく敵の中にして死ぬるよしを存じて。かの骨を拾はんと思ふに。男の身にては敵の陣へいられじ。忽に頭剃りて行く間に。將軍に行き逢ひたり。且は喜び且はかなしむ。將軍のくつばみにとりつきて涙を拭ふ。出家いうがはしといへども。忠節の志尤感に堪へたり。

むかし後漢の光武皇。深山の中にありて。王莽が軍に圍まれたり。すべ

て行方なくて。高岸より飛び落ちてけり。圍を遁れたるのみにあらず。うの身つゝがおはしまさゞりけり。士卒これをあらず。敵のために討たれ給ひぬることを歎きて。各心よわき氣色なりけるに。或臣公王の兄子南陽にあり。何ぞ主なきことを愁へんといひけり。これを思ふには。茂頼が出家。誠にすゝめりといへども。主君父子共にうたがひなく。死するよしを思ふ間。又頼むかたなければ。理りといふべし。すべて彼等が振舞を思ふに。樊噲が鴻門に入りしよりもたけく。豫讓が橋下に伺ひしよりもねんごろなり。

その勢すくなきによりて。貞任を討ち得ざりけるほどに。出羽の國山北の住人清原武則。一家の輩を引き具して。すべて一萬餘騎の兵を。康平五年七月將軍に加りにけり。さて同じき九月十七日にぞ。厨川の柵にして貞任遂にうたれにける。

その時舍弟重任。息男千世童子より始めて。貞任と同じく首を切り。親しき者八人。歩兵數しらず。殘の宗任家任則任等。宗徒の輩十九人。十餘日を經て降人に來れり。

この中に殊にあはれなる事は。則任が妻女舘の破るゝ時。男に語りていはく。君既に死す。我一人生きて何かはせんと。三つなる子を抱きて。高岸より身を投げて死しぬ。見るもの涙を流しけり。頼義義家等。忠を天朝につくして名を遠近にあげらる。

その後年經て。白川院の御時。後藤内則明が老い衰へたりけるを召し出だして。物語せさせられけるに。先づ申していはく。故頼義朝臣の鎮守府を立ちて秋田城へつき侍りし時。薄雪降り侍りしに。軍の男共と申す間。法皇の今は左樣にて候へ。事體幽玄なり。殘事是にて足りぬべしとて。御衣をたまはせけり。（十訓抄）

道の面目

藤原信實

能登の前司橘長政といひしは。今は世をそむきて法名舜緣とかや申すなんめり。和歌の道をたしなみて其名きこゆる人なり。新勅撰にらばれし時。三首とかや入りたりけるを。すくなしとて。きりて出でたりける。

すこしはげしきには似たれども。道を立てたる程はいとやさしくこそ。」其人此頃。あるやんごとなき大臣の家に和歌の會せられけるに。述懷の歌をよみたりける。

あふげども　我身たすくる　神なづき
さてやはつかの　空をながめむ

とよみたりければ。滿座感歎して。此歌よみためて。主も稱美のあまりに。國の所ひとつ。やがてたまはせたりけり。道の面目世の繁昌。ふしぎの事なり。末代にもさすがかゝるやさしきことの殘りたるにこそ。此事を聞きて隆祐侍從いひやりける歌。

みがきける　君にあひてぞ　和歌の浦の
玉も光を　いとぞそふらん（今物語）

同じ人

或る人歌よみ集めて。三位大進と聞ひし人のもとに行きて見せあはせけるに。侍るといふ事をよみたりけるを。歌の言葉にあらずといひければ。ふるき歌にまさしく有りといひけり。よもあらじものをといふに。いでひき出でゝ見せ奉らんとて。古今をひらきて。

山がつの　かきほにはへる　あをつゞら
といふ歌をよみけるいとをかしかりけり。（同書）

紀行の內

二十四日。ひるになりてさやの中山越ゆ。事のまゝとかやいふ社のほど。紅葉いと盛におもしろし。山蔭にて嵐も及ばぬなめり。深く入るまゝに。遠近の峯つゞき。こと山に似ず心ぼそくあはれなり。麓の里に。菊川といふ所にとゞまりぬ。

こえくらす　ふもとの里の　ゆふやみに
まつかぜおくる　さやの中山

あかつき起きて見れば。月も出でにけり。

雲かゝる　さやの中山　こえぬとは
みやこに告げよ　ありあけの月

川音いとすごし。

渡らんと　おもひやかけし　あづま路に
ありとばかりは　きく川の水

廿五日。菊川を出でゝ。今日は大井川といふ河をわたる。水いとあせて。聞きしにはたがひてわこらひなし。河原幾里とかや。いとはるかなり。水の出でたらんおもかげ。おしはからる。

思ひ出づる　みやこのことは　大井川
いく瀬の石の　かずもれよばじ

宇津の山越ゆるほどにしも。阿闍梨の見知りたる山伏行き逢ひたり。夢にも人をなど。昔をわざとまねびたらん心地して。いとめづらかに。をかしくも。あはれにも。やさしくも覺ゆ。急ぐ道なりといへば。文も數多は得かゝず。唯やんごとなき所。ひとつにゞ音づれきこゆる。

我こゝろ　うつゝともなし　宇津の山
ゆめにも遠き　むかしとふとて

蔦かへで　しぐれぬひまも　宇津の山
なみだに袖の　色ぞこがるゝ

今宵は手越といふ所にとゞまる。某の僧正とかやのぼり給ふとて。いと人しげし。宿かりかねつれぞ。さすがに人のなき宿もありけり。

廿六日。藤科川とかや渡りて。れきつの濱にうち出づ。なく〳〵出でし跡の月影など。まづ思ひ出でらる。

畫たち入りたる所に。怪しき黄楊の小枕あり。いと苦しければ。うち臥したるに。硯も見ゆれば。まくらの障子に。臥しながら書きつけつ。

なほざりに　みるめばかりを　かり枕
むすびおきつと　人にかたるな

暮れかゝるほど清見が關を過ぐ。岩越す浪の。白き衣をうち着たるやうに見ゆる。いとをかし。

きよみがた　年ふる岩に　こと問はん
浪のぬれぎぬ　いくかさね着つ

ほどなく暮れて。うの邊の浦近き里にとゞまりぬ。浦人のしわざにや。隣よりくゆりかゝる烟。いとむつかしきにほひなれば。夜のやどなまぐさしといひける人の詞も。思ひ出でらる。よもすがら風いと荒れて。浪たゞ枕のうへに立ちさわぐ。

ならはずよ　ように聞き來し　清見潟
あらいう浪の　かゝるねざめは

富士の山を見れば。烟もたゝず。むかし父の朝臣に誘はれて。いかになるみの浦なれば。などよみしころ。遠江の國までは見しかば。富士の烟の末も。朝夕たしかに見ねしものを。いつの年よりか絶えしと問へば。さだかに答ふる人だになし。

誰が方に　なびきはてゝか　富士の嶺の
烟のすゑの　見えずなるらん

古今の序の詞まで思ひ出でられて

いつの世の　ふもとの塵か　富士のねを

雪さへたかき　山となしけん
くちはてし　ながらの橋を　つくらばや
富士の烟も　たゝずなりなば

今宵は浪の上といふ所に宿りて。荒れたる音。更に目もあはず。

廿七日。明けはなれて後。富士川わたる。朝川いとさむし。數ふれば十五瀬をゞ渡りぬる。

さえわびぬ　雪よりれろす　富士川の
かは風こほる　冬のころも手

今日は日いとうらゝかにて。田子の浦にうち出づ。海士どもの漁するを見ても。

心から　れりたつ田子の　あまごろも
ほさぬうらみと　人にかたるな

とゞ言はまほしき。

伊豆の國府といふ所にとゞまる。いまだ夕日のこるほど。三島の明神へ

参るとて。よみて奉る。

あはれとや　三島の神の　宮ばしら
たぐこゝにしも　めぐり來にけり
おのづから　つたへしあとも　あるものを
神は知るらん　しき島の道
尋ねきて　わが越えかゝる　箱根路を
山のかひある　しるべとぞ思ふ

廿八日。伊豆の國府を出でゝ。箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ。

たまくしげ　箱根の山を　いりげども
なほ明けがたき　よこ雲のそら

足柄山は道遠しとて。箱根路にかゝるなりけり。

ゆかしさよ　うなたの雲を　うばだてゝ
よりになしぬる　あしがらの山

いとさかしき山をくだる。人の足もとぞまりがたし。湯坂とぞいふなる。

辛うじて越えはてれば。又麓に早川といふ河あり。まことにはやし。木の多く流るゝを。いかにと問へば。海士の藻鹽木を。浦へ出ださんとて流すなりといふ。

あづまぢの　湯坂を越ゑて　見わたせば
しほ木ながるゝ　早川のみづ

湯坂より浦にいでゝ。日暮れかゝるにとまるべき所遠し。伊豆の大島まで見渡さるゝ海づらを。いづことかいふと問へど。知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

あまの住む　その里の名も　しらなみの
よする渚に　やどやからまし

丸子川といふ河を。いと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとどまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり。

廿九日。酒匂を出でゝ。濱路をはるゝぐと行く。明けはなるゝ海づらを。いとほろき月出でたり。

浦路ゆく　こゝろぼりさを　浪間より
　　いでゝ知らする　ありあけの月

渚によせかへる浪のうへに霧たちて。あまたありつる釣船見わずなりぬ。

海人小舟　こぎ行くかたを　見せじとや
　　浪にたちうふ　浦のあさぎり

都遠くへだゝりはてぬるも。なほ夢のこゝちして。

立ち離れ　よもうき浪は　かけもせじ
　　むかしの人の　れなじ世ならば

東にて住む所は。月影の谷とぞいふなる。浦ちかき山もとにて。風いとあらし。山寺の傍なれば。のどかにすごくて。浪の音松の風絶えず。都の音信いつしかに。れぼつかなきほどにしも。宇津の山にて行き逢ひたりし山伏のたよりに。ことづけまうしたりし人の御許より。たしかなる便につけて。ありし御返しとれぼしくて。

たびごろも　涙をうへて　うつの山
　　しぐれぬひまも　さぞしぐるらん

ゆくりなく　あくがれ出でし　いさよひの
　　月や後れぬ　形見なるべき

都を出でしことは。十月十六日なりしかば。いさよふ月をれぼしめし忘れざりけるにやと。いとやさしくあはれにて。唯この返事ばかりをぞ又きこゆる。

めぐりあふ　末をぞたのむ　ゆくりなく
　　空にうかれし　いさよひの月（十六夜日記）

第四十八章　韻文の作例

春たつ心をよみ侍りける　攝政太政大臣

みよし野は　山もかすみて　白雪の
　　ふりにし里に　春は來にけり

春の歌　式子内親王

山ふかみ　春とも知らぬ　松の戸に
たえ〳〵かゝる　雪の玉水　西行法師

題しらず

岩間とぢし　氷も今朝は　とけうめて
苔の下水　道もとむらん　藤原通光

水郷春望といふことを

みしま江や　霜もまだひぬ　蘆の葉に
つのぐむ程の　春風ぞふく　藤原秀能

夕月夜　汐みちくらし　難波江の
蘆のわか葉を　こゆる白浪　後鳥羽院

見わたせば　山もとかすむ　水無瀬川
夕は秋と　なにおもひけん

題しらず

とめこかし　梅盛なる　わが宿を
うときも人は　をりにこうよれ　西行法師

百首の歌奉りしとき

難波がた　かずまぬ浪も　かずみけり
うつるもくもる　朧月夜に　源具親

守覺法親王の五十首の歌に

霜まよふ　空にまをれし　雁がねの
かへるつばさに　春雨ぞふる　藤原定家

閑中春雨といふことを

つく〳〵と　春のながめの　さびしきは
まのぶにつたふ　軒の玉みづ　大僧正行慶

雨中苗代といふをよめる

雨ふれば　小田のますらを　いとまあれや
とまあれや　勝命法師

苗代水を　空にまかせて　　西行法師

吉野山　さくらが枝に　雪ちりて
　花ねりげなる　年にもあるかな

五十首の歌奉りし時　　藤原雅經

尋ね來て　花に暮らせる　木の間より
　待つとしもなき　山の端の月

故郷花といへるこころを　　大僧正慈圓

ちりちらず　人も尋ねぬ　ふるさとの
　露けき花に　春かぜぞふく

攝政太政大臣家に五首の歌よみ侍りけるに　　藤原俊成

またや見ん　かた野のみのゝ　櫻がり
　花の雪ちる　春のあけぼの

春の歌　　源具親

時しもあれ　たのむの雁の　別れさへ
　花ちるころの　三吉野の里

湖上花を　　宮内卿

花さそふ　比良の山風　ふきにけり
　こぎゆく舟の　あと見ゆるまで

關路花を　　同じ人

あふ坂や　木ずゑの花を　吹くからに
　嵐ぞかすむ　關の杉むら

最勝四天王院の障子に吉野山かきたる所　　後鳥羽院

みよし野の　高嶺の櫻　ちりにけり
　嵐もまろき　春のあけぼの

落花といふことを　　藤原雅經

花さうふ　なごりの雲に　吹きとめて
　　しばしは匂へ　春の山かぜ

五十首の歌奉りしとき　　寂蓮法師

くれてゆく　春の湊は　まちねども
　　かすみにたつる　宇治の柴舟

山家暮春といへるこころを　　宮内卿

柴の戸を　さすや日かげの　のこりなく
　　春くれかゝる　山の端の雲

齋院に侍りけるとき神だちにて　　式子内親王

忘れめや　葵を草に　ひき結び
　　かりねの野邊の　露の明ぼの

山家曉郭公といへる心を　　藤原實定

小篠ふく　賤のまろやの　かりの戸を
　　明方になく　ほとゝぎすかな

題しらず　　西行法師

道の邊に　清水ながるゝ　柳かげ
　　しばしとてこそ　立ちどまりつれ

たなばたの　とわたる舟の　梶の葉に
　　いく秋かきつ　露の玉づさ

題しらず　　藤原俊成

さびしさは　うの色としも　なかりけり
　　槇たつ山の　秋の夕ぐれ

題しらず　　寂蓮法師

今宵たれ　すゞ吹く風を　身にしめて
　　よしの〻嶽に　月をみるらん

海邊秋月といふ事を　　源頼政

鴨長明

松まや　汐くむ海人の　秋の袖
　月はもの思ふ　ならひのみかは

百首の歌たてまつりし時　藤原實房

山おろしに　鹿の音たかく　聞ゆなり
　尾上の月に　さ夜や更けぬる

擣衣のこゝろを　藤原雅經

みよしのゝ　山の秋風　さよふけて
　ふるさとさむく　衣うつなり

冬の歌　二條院讃岐

世にふるは　苦しき物を　槇の屋に
　やすくも過ぐる　初しぐれかな

題しらず　西行法師

津の國の　難波の春は　夢なれや
　蘆の枯葉に　風わたるなり

雪をよめる　寂蓮法師

ふりそむる　今朝だに人の　待たれつる
　みやまの里の　雪の夕ぐれ

題しらず　藤原良經

石の上　ふる野の小笹　霜をへて
　一夜ばかりに　のこる年かな

百首の歌奉りし時　藤原實房

いうがれぬ　年の暮こそ　あはれなれ
　昔はよりに　聞きし春かは

五十首の歌奉りしとき　藤原家隆

明けば又　こゆべき山の　峰なれや
　空ゆく月の　末のまちくも

長月の頃。初瀬に詣でける　禪性法師

道にてよみ侍りける

初瀬山　夕こゝろくれて　宿とへば
　三輪の檜はらに　秋風ぞふく　僧正雅縁

題しらず

又こゝろん　人もとまらば　あはれ知れ
　わが折りあける　峯の椎柴　東の方にまかりけるによみ侍りける　西行法師

年たけて　又こゆべしと　思ひきや
　命なりけり　さやの中山

題しらず　よみ人しらず

ようにのみ　見てや止みなん　かゞらきや
　高間の山の　峰のしらくも

戀といへる心を　藤原定家

年もへぬ　祈るちぎりは　はつせ山
　をのへの鐘の　よりの夕暮　藤原惟成

題しらず

しばし待て　まだ夜はふかし　長月の
　有明の月は　人まどふなり　藤原忠良

折にあへば　これもさすがに　あはれなり
　小田のかはづの　夕暮の聲　最勝四天王院の障子に阿武隈川かきたる所　藤原家隆

君が代に　あふくま川の　埋木も
　こほりの下に　春をまちけり　海邊のこゝろを　藤原秀能

今さらに　住みうしとても　いかゞせん
　なだの鹽屋の　夕暮の空

大神宮に奉りける百首の歌の中に若菜をよめる　藤原俊成

けふとてや　磯菜つむらん　伊勢島や
一志の浦の　あまの少女子

山家のこゝろを　小侍從

樒つむ　山路の露に　ぬれにけり
曉れきの　すみぞめの袖

題しらず　西行法師

ふる畑の　棱の立木に　ぬる鳩の
友よぶ聲の　すごき夕暮

西院の邊に早うあひしれりける人を尋ね侍りけるに。堇つみ侍りける女。しらぬよし申しければよみ侍りける　能因法師

石の上　ふりにし人を　たづぬれば
あれたる宿に　すみれつむなり

よみて侍りける百首の歌を。源家長がもとに見せにつかはしけるおくに。書きつけて侍りける。　藤原行能

かき流す　言の葉をだに　沈むなよ
身こそかくても　山川の水

鳴の社の歌合とて人々よみ侍りけるに。月を　鳴長明

石川や　せみの小河の　きよければ
月もながれを　尋ねてぞすむ

（以上五十二首新古今和歌集）

春の歌とてよみ侍りける　鎌倉右大臣

此ねふる　あさけの風に　かをるなり
軒ばの梅の　春の初花

題しらず　藤原雅經

春の夜の　月も有明に　なりにけり
うつろふ花に　ながめせしまに

五月雨をよみ侍りける　源家長

うちはへて　いくかゝへぬる　夏引の
手びきの糸の　五月雨の空

閑庭薄　藤原信實

まねけとて　うゑし薄の　一もとに
とはれぬ庭ぞ　あげりはてぬる

題しらず　藤原家隆

さらしなや　をばすて山の　高ねより
嵐をわけて　出づる月影

秋の歌　藤原定家

天の原　思へばかはる　色もなし
秋こう月の　ひかりなりけれ

月五十首歌よみ侍りけるによめる　同じ人

あけば又　秋のなかばも　過ぎぬべし
かたぶく月の　をしきのみかは

題しらず　如願法師

棹鹿の　鳴くねもいたく　更けにけり
嵐の後の　山のはの月

秋の歌よみ侍りけるに　鎌倉右大臣

わたの原　八重の沙路に　とぶ雁の
翅のなみに　秋風ぞ吹く

百首歌の中に　式子内親王

秋こうあれ　人は尋ねぬ　松のとを
いくへもとぢよ　つたの紅葉ば

題しらず　藤原家隆

古郷の　庭の日影も　さびくれて
　桐の落葉に　霰ふるなり

神樂をよみ侍りける　法印慶算

里樂神　あらしはるかに　音づれて
　ようの寐覺も　神さびにける

家の百首歌よませ侍りけるに　中宮少將

れのがねに　つらき別は　ありとだに
　思ひもまらで　鳥や鳴くらん

戀の歌とてよみ侍りける　中納言親宗

うたゝねの　はかなき夢の　覺めしより
　夕の雨を　見るぞかなしき

建保三年内裏の歌合に　藤原信實

あづまぢの　富士のまば山　まばしだに
　けたぬ思ひに　たつけぶりかな

題しらず　行念法師

梅が香の　たが里わかず　匂ふ夜は
　ぬしさだまらぬ　春風ぞ吹く

題しらず　藤原賴氏

まがらきの　杣山櫻　春ごとに
　いく世宮木に　もれて咲くらん

ひとり思ひをのべ侍りける歌　鎌倉右大臣

山はさけ　海はあせなん　世なりとも
　君にふた心　われあらめやも

百首歌よみ侍りける　後京極攝政前太政大臣